
令和5年度共通教育 活動報告書

P

I 「共通教育実施委員会」活動の総括

1

II カリキュラム等編成部会

4

III 自己点検・自己評価部会

5

IV FD部会

7

V 広報部会

8

VI 分科会報告

1	大学基礎論分科会	10
2	課題探求実践セミナー分科会	14
3	学問基礎論分科会	17
4	人文分野分科会	24
5	社会分野分科会	34
6	自然分野分科会	35
7	医療・スポーツ科学分科会	38
8	外国語分科会	42
9	キャリア形成支援科目分科会	58
10	日本語・日本事情分科会	59

I 令和5年度「共通教育実施委員会」活動の総括

2024年3月27日

共通教育実施委員会

1. 共通教育実施委員会および常任会議

本年度も、新型コロナウイルスの影響により、予定していた計画が実施できない部会もあった。しかしオンラインによる授業実施やアンケートなども定着し、より効率的・効果的な運営が行えるようになった側面もある。

本年度は、以下の3項目を重点事項とした。

- 令和6年度からの共通教育担当新カリキュラムの策定
- 共通教育教養科目カリキュラムの点検と改善に向けた取組
- 令和5年度に本学が当番校となる国立大学教養教育実施組織会議及び事務協議会の開催

それぞれの重点事項に関する成果は以下の通りである。

令和6年度からの共通教育新カリキュラムに関しては、昨年度の議論や決定を踏まえ、決定された新領域ごとに、具体的な科目数による開講科目の策定を行った。授業効果を落とさずに効率的、かつ学修者本位の科目の設定を行った。「生活」や「複合領域」など新たに立ち上げられた分科会は、科目の策定とともに分科会の運営をどうするかについても協議した。

共通教育における共通教育教養科目カリキュラムの点検と改善に向けた取り組みについては、シラバスチェックが3年目となり、自己点検評価部会によって体制が整備され、シラバスにおける授業内容や評価基準をよりわかりやすく、明確に、学生に提示できるようになった。新年度からはシラバスの様式も変更されるため、新たな様式に沿ったシラバス執筆について、チェックを行った。

国立大学教養教育実施組織会議及び事務協議会については、2023年5月20日にオンラインにて実施し、多くの参加者を得、無事に執り行うことができた。当日発表や司会を担当された先生方には篤く御礼申し上げます。

2. 部会活動

本委員会では、これまで「カリキュラム等編成部会」、「自己点検・自己評価部会」、「FD部会」、「広報部会」の4部会において、それぞれの領域における委員会全体の取りまとめや分科会活動への支援を行ってきており、今年度もこの方式を継続した。以下、各部会の取り組みの要点のみ、略記する(詳細は各部会の報告を参照)。

カリキュラム等編成部会では、新カリキュラムによる編成を3回の部会開催を通じて順調に進め、新カリキュラムに沿った授業題目表を作成することができた。

自己点検・自己評価部会では、「e-ポートフォリオ」を活用した授業評価アンケートの実施を依頼した。またシラバスに関し、各分科会でチェックをピアレビュー等を使って行うシステムを構築し、実施した。

FD部会では、共通教育においてFD・SDウィークに6件の授業参観を行い、それ以外にも独自に授業参観を行うなど、活発なFD活動が行われた。

広報部会では、『パイプライン』第62号・第63号を発行した。電子化された広報誌『パイプライン』の読まれ方について、調査を行った。さらに、共通教育再編に伴う『パイプライン』のあり方の見直しについても、議論を行った。

3. 分科会活動

本委員会における分科会活動は、これまで「カリキュラム編成」「自己点検評価」「FD」という3つの任務を柱として自律的に取り組んできた。以下、各分科会で取り組まれた活動について、それぞれの項目ごとの概要は以下の通りである(詳細については各分科会の報告を参照)。

(1) カリキュラム編成の取り組みについては、分科会ごとの個別の報告に譲るが、どの分科会も問題なく編成することができた。

(2) 各分科会の取組は、以下の通りであった。

大学基礎論分科会では、各学部で、担当教員間での話し合いや情報交換、授業アンケートの分析、FDが行われた。

学問基礎論分科会では、各学部においてアンケート調査が活発に行われ、オンラインでの授業実施を含めたさまざまな分析が行われた。

課題探求実践セミナー分科会では、部会長や授業担当者のFDセミナーへの参加が活発に行われた。また、授業改善アンケートを行った。

人文分野分科会では、「アフターコロナの授業におけるオンラインツール活用状況」のアンケート調査をおこない、調査結果の共有と紙上情報交換会を開催し、アフターコロナでの効果的な授業方法など自己の授業改善を図った。また、内部質保証体制を整備するため、主として成績分布の分析を行い、その結果を総括した。

社会分野分科会では、独自のFDやアンケート等を行えなかったが、物部開講授業のオンライン実施などの検討を行った。

自然分野分科会では、内部質保証体制の実施方法について、委員内で議論を行い、またシラバスチェックを実施した。さらに、R6年度から開始される新カリキュラムについて検討を行った。

スポーツ・健康分科会では、講義科目である「健康」、「スポーツ科学講義」について、授業評価アンケートを実施し、実技科目においても、同様の授業評価アンケートを実施した。また、より科学的なスポーツ科学実技の授業の展開につなげることを目的とし、リアルタイムフィード

バックシステムを新たに導入し、授業内でどのように取り扱うか分科会委員で検討するFDを開催した。

外国語分科会は、FD 講演会：大学における外国語授業の問題点と可能性について、境一三講師（慶応大学名誉教授）を招聘し、講演「新学習指導要領は大学教育にどのような変化をもたらすのか？—資質・能力論を中心に考える—」を開催した。また前期・後期の試験期間終了後に学生アンケートを実施した。

キャリア形成支援分科会では、全学のキャリア形成に関する動向を把握することに務め、またシラバスチェックを行った。

日本語・日本事情分科会では、自己点検評価・FD活動を実施するとともに、FD研修に参加した。

4. その他

- (1) 『令和5年度共通教育実施委員会活動報告書』は、4月中に発刊し、WEB上で公開する。
- (2) 委員が交代する場合には、次年度の課題に対する検討も含め、引き継ぎをお願いしたい。

Ⅱ カリキュラム等編成部会

カリキュラム等編成部会長 川本真浩（人文社会科学部）

1. カリキュラム等編成活動の経過

◎2023年7月11日 第1回カリキュラム等編成部会（オンライン）

カリキュラム改編とともにカリキュラム編成の作業手順も大きく変更されるため、まずは高橋俊・共通教育主管から令和5年度以降の本部会の体制及び令和6年度以降の授業開講予定科目数、そして編成作業の変更点について説明が行われた。それら説明に基づく令和6年度共通教育授業担当体制案（とくに分科会ごとの担当科目数）について、部会として了承し、各分科会へ提示されることとなった。

◎2023年10月16日 第2回カリキュラム等編成部会（オンライン）

前回の部会です承された担当体制案について、いくつかの分科会からの変更希望をうけて調整が行われ、令和6年度共通教育授業担当体制が了承された。このあと開催される共通教育実施委員会において、この担当体制が承認された後、すみやかに令和6年度共通教育授業題目表の作成を各分科会長に依頼することが了承された。また機構・センター等所属教員に対して、令和6年度共通教育授業担当への協力を依頼することが報告された。

◎2024年1月15日 第3回カリキュラム等編成部会（オンライン）

各分科会からの回答を集約して作成された令和6年度の共通教育授業題目表を確定させた。また、機構・センター等所属教員による新規開講科目の確認を行った。

2. 令和5年度カリキュラム等編成活動の総括

令和6年度にスタートする新カリキュラムに応じて、本部会での作業手順の一部が大きく変更された。とくに、従来は最初に各学部への依頼を行っていた部分が、各分科会へ依頼し、分科会から各学部の所属教員へ直接に科目担当の依頼を行うこととなった。また、非常勤講師が担当する授業についても、予算面の制約などから一部変更を余儀なくされた。

作業途上においては、従来にはなかったいくつかの調整局面もあったが、共通教育主管、各分科会長、全学・共通教育係の尽力により、全体としては混乱無く改編初年度の作業を終えることができた。各学部・機構・センター所属の授業担当教員もあわせた関係各位に対して、あらためて感謝の意を表したい。

来年度は、あらたにスタートしたカリキュラムの実施状況を精査しながら、学生にとってより良い共通教育を構築するために、当部会としてカリキュラムの円滑な運営・実施に最善を尽くしたいと考える。

Ⅲ 自己点検・自己評価部会

自己点検・自己評価部会 部会長 杉田 郁代

令和5年度活動の概要

1. 本部会の教育目標

本部会は、授業評価アンケート（Reflective モニタリングを含む）実施の促進を行う。また、各分科会と連携協力して全共通教育科目シラバスの点検体制を構築し、次年度のシラバス点検を行う。

3. 活動報告

3.1 授業評価アンケートの実施について

本部会では、学期ごとに授業5週目、15週目が近づくと、学務課共通教育係を通じて、授業評価アンケートの実施を授業担当者へ依頼する。授業評価アンケートを実施する目的は、各授業担当者の個人単位の授業改善につなげることである。本部会は、教員の授業改善に向けて、授業評価アンケート実施の促進を行う。

本学には、授業評価アンケートの実施方法は複数ある。授業の特性等に応じて授業担当教員が選択することができる。令和5年度の実施方法は、共通教育の授業科目においてe-ポートフォリオを用いて実施された授業評価アンケートは、11科目（1学期4科目、2学期7科目）であった。また、KULAsを通じて実施した授業評価アンケートは、62科目（1学期は48科目、2学期は14科目）であった。それ以外に、各分科会主導や授業担当者個人で、上記以外の方法においても、授業評価アンケートを実施している。

3.2 共通教育科目のシラバス点検について

共通教育科目におけるシラバス点検は、授業担当教員が入力したシラバスを各分科会の連携と協力のもと実施する。本年度の活動は、令和6年1月12日（金）に、第1回 共通教育実施委員会 自己点検・自己評価部会を開催し、令和6年度共通教育科目におけるシラバス点検に向けて審議を行った。審議では、冒頭に高橋共通教育主管からシラバス点検の経緯とその協力依頼があった。

シラバス点検のスケジュールは、授業担当教員が入力したシラバスを確認期間開始日（令和6年2月26日（月））に事務から自己点検・自己評価担当教員に送付されるこ

とから始まる。次に、「分科会構成員によるピアレビュー」を行われ、修正が必要な科目については、授業担当教員にシラバス修正を依頼する。その後、修正確認期間に最終点検を行い、修正が行われていない場合は、再度依頼を行う。シラバス点検は、この依頼を持って完了とする。

シラバス点検では、学生に公開する前に、各分科会と自己点検・自己評価部担当教員と連携協力のもとで、複数の教員の目で点検を行う。この点検は、シラバスが学生に公開される前日までに作業を終えることが求められる。1ヶ月という短期間の間に、全共通教育科目のシラバス点検を行う。

最後に、本年度も公開日までに各、分科会と学務課共通教育係で円滑に作業が進められ無事に点検を終えることができた。この場を借りて、各分科会、自己点検・自己評価部会担当教員、学務課共通教育係の皆様へ感謝申し上げます。

IV FD部会

部会長 波多野 慎悟

今年度はFD・SD ウィークで6件の授業参観が実施された。内訳は人文分野2（文学と社会、スタディ・スキルとしての日本語表現入門）、外国語分野1（中国語Ⅰ）、社会分野1（障害者支援入門）、キャリア形成支援科目1（ピア・サポート理論と実践）、初年次科目1（課題探求実践セミナー（人文社会科学部））であった。

V 広報部会

部会長 山崎聡

1 本年度広報部会の構成委員

部会長：山崎聡（教育学部）

西尾美穂（人文社会科学部）、加藤治一（理工学部）、関安孝（医学部）、筵平裕次（農林海洋科学部）、佐藤洋子（地域協働学部）

2 本年度部会の活動方針

広報誌『パイプライン』の発行（年2回）、電子化された『パイプライン』の読まれ方に関する調査を行う。

3 本年度部会の活動報告

3-1) 概要

広報部会活動計画についてメール会議を開催した。

電子化された広報誌『パイプライン』の読まれ方について、当該ウェブサイトへのアクセス数を確認し、分析検討した。

『パイプライン』第62号を10月に発行、第63号を3月に発行（予定）した。

3-2) 部会議事と関連会議事項

- ・第1回部会（メール会議：令和5年7月31日）：議題『パイプライン』第62号発刊計画および令和5年度活動計画について
- ・パイプライン発行にあたって、62号の発行内容と作業内容を網羅した計画案を作成した上で、編集作業の概要を提示し、承認された。
- ・今年度の活動計画と予算案について諮り、承認された。
- ・特集は、ローテーションにより、分科会「外国語」「日本語・日本語事情」とした。
- ・第2回部会（メール会議：令和5年12月4日）：議題『パイプライン』第63号発刊計画について
- ・パイプライン発行にあたって、63号の発行内容と作業内容を網羅した計画案を作成した上で、編集作業の概要を提示し、承認された。

3-3) 本年度の審議内容の概要

3-3-1) 『パイプライン』発行業務の自己点検・評価について

- ・例年どおり、『パイプライン』の読まれ方に関して、当該ウェブサイトへのアクセス数の調査を実施した。
- ・今年度も昨年度に引き続いて、発行のアナウンスを、グループウェア、KULAS、Facebook および学生掲示板を通じて行い、より多くの人々に周知するよう努めた。

3-3-2) 『パイプライン』の編集・発行について

- ・第 62 号を令和 5 年 10 月に HP に掲載した。

特集は分科会で、「外国語」「日本語・日本語事情」であった。

教養の頁は、ローテーションに基づき、理工学部の担当であった。

FD 部会報告

共通教育実施機構委員会から

- ・第 63 号の編集を行った（発行は 3 月の予定）。

特集は、「教養科目」であった。教養科目授業の感想、意義、受講にあたってのアドバイス等

学生記者(各学部から計 12 名)：原稿 400 字程度。原稿料 1500 円 (支払書類要)、院生も可としている。

教員(6 名)：各学部 1 名 原稿 800 字程度

4 次年度（以降）の課題

- ・昨年からの継続課題であるが、共通専門科目が廃止されたことに伴い、特集のローテーション 1 ターン分抜け落ちたので、変化に乏しく、やや平板となる懸念が生じている。この点を鑑みると、編集方針を再考するべき時期に来ているように思われる。
- ・引き続き、『パイプライン』に原稿執筆することの意義を再確認・周知するとともに、意欲的に執筆できるような編集内容（構成）へと高めていきたい。
- ・アクセス数増加のための手段については、依然、検討対象となっている。
- ・共通教育の現体制は令和 5 年度一杯をもって廃止となり、令和 6 年度以降は新体制に移行する見込みであることから、『パイプライン』の構成も刷新されることとなる。新体制下で各分科会が再編されることに伴い、新しい編集方針についても各方面からの意見を参考に、より適切かつ柔軟に構想していく予定である。

VI 分科会報告

1 大学基礎論分科会

大学基礎論分科会長 鈴木保志（農林海洋科学部）

本科目の授業形式や教員の担当方式等は各学部で決定し、実施しているが、共通する目標は以下の3項目である。

- ① 大学で学ぶことの意義と目的について考え、「教わる」から「学びとる」へ学びの姿勢を転換する。
- ② 卒業時に自分がどうなっていたいか、どのような能力をつけるべきかを考える。
- ③ 社会における大学や学問の位置づけ、高知における高知大学の存在意義について考える。

これらの3項目について考える作業を講義やグループワークで行うことによって、コミュニケーション能力の向上、議論の進行方法及び合意形成手法の修得を図る。これらを受けて、大学基礎論の教育目標が達成されるようカリキュラム編成を進めると共に、必要に応じて授業改善に向けた自己点検・評価活動、並びにFD活動を実施した。

1. カリキュラム編成

今年度度、講義が数年ぶりに完全に対面形式で実施され、moodleによる非同期型オンライン形式の講義や授業時間外の活動を想定したMicrosoft teamsを活用した共同作業も適宜取り入れられたことも踏まえ、次年度における各講義の内容について検討を行った。各講義の配置に至った各学部の経緯、担当教育母体の意思等を確認し、ほぼ例年通りのカリキュラム案が了承された。

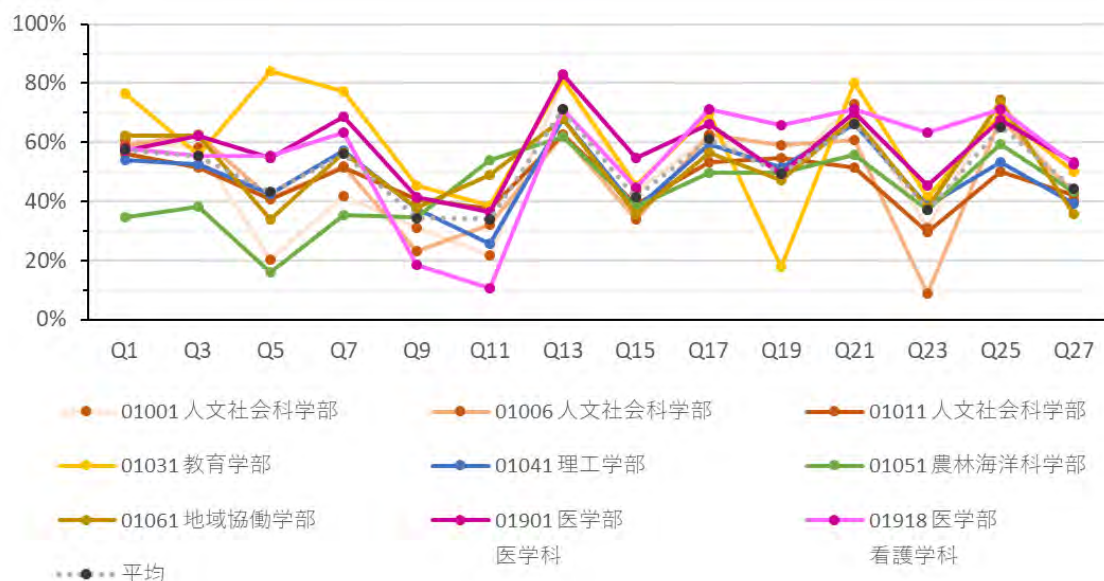
2. 自己点検評価活動

昨年度（令和4年度）は、本学の新型コロナウイルス感染症対策に従い、一部の講義でオンライン講義が実施され、レポートや課題提出状況によって評価される場合もあった。これに対し今年度（令和5年度）は、コロナ禍前と同様、大学基礎論はグループワーク等の演習を対面形式で実施した。

今年度も昨年度と同様にKULASのWEBアンケートを活用して授業アンケートを実施した（7月24日（月）～7月31日（月）に実施）。授業目標に関する8つの質問に対して、「はい」、「どちらかというとはい」、「どちらともいえない」、「どちらかというといいえ」、「いいえ」の5段階で回答を求めた結果、「はい」という最も肯定的な回答をした回答者の割合を以下の表および図に示す（設問の詳細については表の方を参照）。

表：大学基礎論の授業目標に対して、「はい」と回答した回答率（％）

コード	01001	01006	01011	01031	01041	01051	01061	01901	01918		
学部	人文社会 科学部	人文社会 科学部	人文社会 科学部	教育学部	理工学部	農林海洋 科学部	地域協働 学部	医学部 医学科	医学部 看護学科	平均	変動係数 (%)
受講生数	104	77	112	138	274	213	68	111	60	128.6	55.4
回答者数	74	56	64	106	184	113	53	77	38	85.0	52.2
回答者数の受講生に対する割合	71%	73%	57%	77%	67%	53%	78%	69%	63%	68%	12.5
Q1：授業を通じ「大学で学ぶことの意義と目的について考える」ことができたか。	60.8%	58.9%	56.3%	76.4%	53.8%	34.5%	62.3%	57.1%	57.9%	57.6%	18.8
Q3：「教わる」から「学びとる」へ学びの姿勢を転換することの重要性を認識する」ことができたか。	58.1%	62.5%	51.6%	55.7%	52.7%	38.1%	62.3%	62.3%	55.3%	55.4%	13.9
Q5：「卒業時又は卒業後の自分の将来像について意識する」ことができたか。	20.3%	41.1%	40.6%	84.0%	42.4%	15.9%	34.0%	54.5%	55.3%	43.1%	47.1
Q7：「卒業時にどのような能力をつけておくべきか考える」ことができたか。	41.9%	51.8%	51.6%	77.4%	57.1%	35.4%	56.6%	68.8%	63.2%	56.0%	23.1
Q9：「社会における大学や学問の位置づけについて考える」ことができたか。	31.1%	23.2%	40.6%	45.3%	37.5%	34.5%	37.7%	41.6%	18.4%	34.4%	25.6
Q11：「高知における高知大学の存在意義について考える」ことができたか。	21.6%	32.1%	37.5%	38.7%	25.5%	54.0%	49.1%	36.4%	10.5%	33.9%	39.6
Q13：「相手の話をよく聞き、自分の考えを分かり易く伝えるという双方向コミュニケーション能力の重要性を認識する」ことができたか。	81.1%	62.5%	62.5%	81.1%	67.9%	61.9%	67.9%	83.1%	71.1%	71.0%	12.2
Q15：「議論の基本的な進行方法と合意形成の手法を修得することの重要性を認識する」ことができたか。	43.2%	33.9%	39.1%	45.3%	37.5%	38.1%	35.8%	54.5%	44.7%	41.4%	15.3
Q17：「講義」では、自分自身で考えるためのきっかけ・視点・知識などを得ることができたか。	62.2%	62.5%	53.1%	69.8%	59.2%	49.6%	56.6%	66.2%	71.1%	61.1%	11.9
Q19：講義を受けて作成した「レポート」では、講義内容を振り返るとともに、講義内容に関する自分の意見をまとめることができたか。	50.0%	58.9%	54.7%	17.9%	51.6%	49.6%	47.2%	49.4%	65.8%	49.4%	26.6
Q21：「演習（グループワーク）」では、相手の意見に耳を傾け理解するとともに、自分の意見を相手に伝えることができたか。	73.0%	60.7%	51.6%	80.2%	66.3%	55.8%	67.9%	70.1%	71.1%	66.3%	13.5
Q23：「プレゼンテーション」では、自分や自分のグループの意見を分かりやすく発表することができましたか。	31.1%	8.9%	29.7%	41.5%	38.6%	37.2%	37.7%	45.5%	63.2%	37.0%	38.8
Q25：あなたは、この授業に意欲的に取り組みましたか。	74.3%	67.9%	50.0%	69.8%	53.3%	59.3%	73.6%	67.5%	71.1%	65.2%	13.6
Q27：グループワーク等において、担当教員から適切な助言やサポートを受け、それを役立てることができたか。	40.5%	42.9%	42.2%	50.0%	39.1%	43.4%	35.8%	53.2%	52.6%	44.4%	13.8
平均	49.2%	47.7%	47.2%	59.5%	48.8%	43.4%	51.8%	57.9%	55.1%	51.2%	10.4
変動係数（％）	39.9	37.2	19.0	34.0	25.1	28.7	26.9	21.9	34.6	29.7	24.0



図：大学基礎論の授業目標に対して、「はい」と回答した回答率（%）

全体を通じて「はい」という回答率は約 51%（昨年度は約 45%）となった。しかし回答率は、質問項目や学部（コード）によって大きく変動した。具体的には、「はい」の回答率は、「Q13: 「相手の話をよく聞き、自分の考えを分かり易く伝えるという双方向コミュニケーション能力の重要性を認識する」ことができましたか」という問いで最も高い値（71%; 昨年度 69%）を示し、「Q11: 「高知における高知大学の存在意義について考える」ことができましたか」という問いで最も低い値（34%; 昨年度 28%）を示した。これらの傾向は昨年と同様であったものの、回答率の値自体は昨年度よりやや高くなっている。

学部（コード）間では、教育学部の「はい」の回答率が他の学部よりも高い値を示し、特に「Q5: 「卒業時又は卒業後の自分の将来像について意識する」ことができましたか」、「Q7: 「卒業時にどのような能力をつけておくべきか考える」ことができましたか」という 2 つの問いに対する「はい」の回答率はそれぞれ 84%と 77%と高い値を示した。医学部でも同様の傾向がみられ、これら 2 学部の順位は逆となるが、これも昨年度と同様の傾向である。その理由として、昨年度の報告でも考察されているように、医学部医学科と教育学部では回答理由の中にもそれぞれ「医師」や「教員」という言葉が頻繁に挙げられており、1 年次において卒業後の将来像を明確に描いている受講生が多いことが影響していると考えられた。また、最も回答率の低かった高知大学の存在意義に関する問いでは、農林海洋科学部、地域協働学部、教育学部、医学部医学科が約 54~36%と比較的高い値を示し、それらの学部や学科では地域に密着した教育と研究が行われていることが窺われた。この傾向は、農林海洋科学部、地域協働学部、医学部医学科では昨年度も同様であったが、教育学部において昨年度の約 29%から今年度は約 39%と上昇しており、関係教員の講義における工夫等の成果と考え

られる。

設問は、大きく分けると Q1～11 が大学や学問の意義についての学びの成果、Q13～27 が自らの学びやグループワークにおける議論や意見とりまとめについての習熟等、に 2 文できる。Q1～11 については先の段落に記したように学部・学科に応じた特色が反映されているものと考えられた。Q13～27 については学部・学科間の差は大きくないものとみられる。ただし、いくつかの項目で値が低い学部・学科が認められ、これらについては改善の余地があるものと思われる。

3. FD 活動

本分科会の位置づけ、並びに取り組み状況を委員間で共有した。他の分科会や大学全体での FD 実施に関連する情報については担当委員内での共有を図った。

一昨年度の活動報告書においては、新型コロナウイルス感染症対策による授業の弊害事例として、受講生同士の交友活動、並びに意見・情報交換を活発に行うことが困難で、教員からのサポートを受け難いことを挙げる一方、オンライン授業の利点として、ファイルの共有の便利さが挙げられ、moodle や Microsoft teams 等を適切に利用し、コロナ感染状況に柔軟に対応する必要性が指摘されていた。これを受けて、昨年度は、新型コロナウイルス感染症対策により、授業の一部をオンライン授業とする等の対応がとられたが、一例として、オンライン授業ではライティング講座を実施することで、受講生のスキルの底上げをはかり、対面でのゼミでは、グループワーク等を行うことで、受講生間や教員との意見・情報交換を活発に行うといった、前年度からの上記の課題の解決に取り組む実践もみられた。今年度も昨年度の経緯と成果を考慮して、moodle によるオンラインコンテンツの利用などが行われた。それぞれ学部、学科、コース等の単位で FD を実施しながら、授業改善に取り組んだ。

2 課題探求実践セミナー分科会

課題探求実践セミナー分科会長
俣野秀典（地域協働学部）

—カリキュラム編成活動—

1. 令和5年度カリキュラム編成の経過

学部開講課題探求実践セミナーについては各学部へ依頼し、それ以外のセミナーについては各担当者に授業実施を依頼した。

令和4年度開講授業題目

人文社会科学部開講セミナー	6 題目
教育学部開講セミナー	1 題目
理工学部開講セミナー	3 題目
医学部開講セミナー	2 題目
農林海洋科学部開講セミナー	2 題目
地域協働学部開講セミナー	3 題目
自由探求学習	2 題目
学びを創る	1 題目
国際協力入門	1 題目

(※定員は授業ごとで異なる)

2. 令和6年度への課題

担当教員が実施しやすく、かつ学生にとっても履修しやすいようなカリキュラム編成となるよう努力したい。

課題探求実践セミナーでは、教育効果を検討することを目的として、授業評価アンケートを実施している。ここでは、共通教育開設科目のうち前期開講科目の2科目（学びを創る、自由探求学習 I）、および理工学部担当分（3 クラス開講）でのアンケートの分析結果を示す。授業評価アンケートは、いずれのクラスも 2023/7/31-8/13 の期間に実施されており、7割弱の受講生から回答があった。また、本授業は1年次配当科目であることから、受講者、およびアンケート回答者はほとんどが1年生であった。

【課題探求・問題解決力について】に関する問（Q4～11）では、「はい」「どちらかというとはい」の回答率が、いずれも8割以上であった。特に、共通教育開設の2科目では、ほぼすべての回答者が、このどちらかに回答していた。これらの問いに関連した自由記述（この授業で印象に残っていることがあれば書いてください）では、「課題に対して自主的に学び、他者にわかりやすく伝えるということの難しさを知りました」「自ら課題を探して解決することの大変さを改めて感じた」や「私では絶対に思いつけない課題が沢山挙げられていて、視野が全然違うなと思知らされました」など、課題設定の難しさや様々な視点から物事を眺めることの大切さに気付いた回答が寄せられた。中には、「問題解決力にある『問題解決』という言葉は、厳密には正解を出すということではなく、自分と周りの人が納得できるような行動をとることなのではないかと気づいたこと」といった、大学での学びの本質に近いような回答も見受けられた。

【協働実践力について】に関する問（Q13～20）においても、「はい」「どちらかというとはい」の回答率が8割以上であり、共通教育開設の2科目においてはほぼ100%であった。上記と同様に自由記述をみると、「異なる価値観の人たちとの活動でしか得られない発見があると実感しました」「役割分担と報連相の大切さを実感しました」や「グループで活動することで自分にはない考えや意見を知ることができた」など、他者との関りの重要性を実感する声が見られた。しかし、「積極的に参加してくれる人としてくれない人の差が大きい。それで、グループでの評価は納得がいかない」や「何もしない人や自分勝手な人がいると困るなと感じました」といったコメントも寄せられていた。今後の大学生活の中で必ず履修する学生実験（2～3名のグループで一緒に取り組む）や、卒業研究における配属先研究室での活動において重要になる“協働”というワードの大切さを体験した学生もいたようである。

以上のことより、課題探求・問題解決力、および協働実践力習得に向けたイントロダクションとして、課題探求実践セミナーがその役割を果たしていると考えられる。しかし、どの授業でもいえることであるが、アンケート回答者は比較的その授業に好意的であることから、今後は全ての学生にポジティブ・ネガティブ両方の意見を回答させるようなアンケートを実施することも、授業評価には必要かもしれない。

本年度も FD 関連のイベントへの参加はあまり多くはないが、担当者それぞれが自身の授業で「授業改善アクションプラン」に取り組んでおり、「授業改善支援プログラム」(学び創造センターによる支援)を前期に実施している。なお、「スチューデント・フィードバック」の本年度の実施は確認されていない。

今年度の活動計画に記載されていた以下の 5 項目については、項目 1・2・3・5 への参加が確認された。春季 FD セミナーとして実施される「ファシリテーション研修」は、課題探求実践セミナーをはじめとしたアクティブ・ラーニング系科目における教育力向上を意図されており、課題探求実践セミナー担当者の参加が少数にとどまっていることは課題といえる。

当初想定していたセミナーの他に、大学授業入門(4 月開催)・グループワークのはじめ方/失敗しないための導入とチームビルディング・学生の学びを支援する授業準備ワークショップ(9 月開催)・新任教員のためのリフレクションセミナー(2 月開催)への参加もあった。

1. SPOD フォーラム (8 月開催) への参加
2. 秋季 FD セミナー (9 月開催) への参加
3. 全学 FD フォーラム (11 月開催) への参加
4. 外部セミナー (12 月開催) への参加
5. 春季 FD セミナー (2 月開催・学内ファシリテーション研修) への参加

課題探求実践セミナーは、教員が教え込む授業ではなくグループワーク型の授業であることから、OJT-FD 教員の参加および受け入れが最も有効な FD 活動の一つであると考えられる。来年度も引き続き、「自由探求学習」などチームビルディングに力を入れている授業への受け入れを通して、学生の変容とファシリテーターとしての教員の役割を体感・体得できるように取り組んでいきたい。また、「グループワークのはじめ方/失敗しないための導入とチームビルディング」「グループワークのためのファシリテーション入門」への参加呼びかけを行いたい。

令和 5 年度の FD 活動のうち、課題探求実践セミナー担当者(令和 5 もしくは 6 年度担当)が参加した代表的なものは以下のとおりであった。

4 月	大学授業入門	4 名
9 月	秋季 FD セミナー	2 名
	学生の学びを支援する授業準備ワークショップ	3 名
11 月	全学 FD フォーラム	6 名
2 月	リフレクションセミナー	5 名
	春季 FD セミナー	1 名
前期	授業改善支援プログラム	1 名
前期・後期	グループワークのはじめ方	5 名

3 学問基礎論分科会

学問基礎論分科会長 小野寺栄治

1. 学問基礎論分科会の運営体制

学問基礎論の主な内容と学習到達目標は以下のように設定されている。

専攻する学問の輪郭を学びます。それぞれの学部・学科で学べる専門分野や研究テーマについての知識を得て、専門教育でこれから学んでいく際の展望を持つことが目標です。このほか、文献検索の方法、学術論文の読み方、レポート作成の技術など、専門教育で必要となる基礎的な知の技法を身につけます。

この目標の達成に向けて、各学部・学科（分野、コース）において、それぞれの裁量と工夫により、授業形態や授業方法及び教員の担当方式等を決定し、2年次以降の専門科目を見据えた授業が行われた。学問基礎論分科会としては、次年度からの共通教育再編（学問基礎論は導入科目群「大学での学びかた科目」の科目区分に属することになる）を念頭に置きつつ、次年度のカリキュラム編成と自己点検評価活動を行うことを基本とした。なお、本年度の学問基礎論分科会委員は以下に示す計7名の委員で構成された。

分科会会長：小野寺栄治（理工学部）、

副分科会長（FD 部会）：老川稔（理工学部）、

副分科会長（自己点検・自己評価部会）：藤田博一（医学部）、

その他の委員：稲田朗子（人文社会科学部）、望月良親（教育学部）、中野道治（農林海洋科学部）、石筒覚（地域協働学部）

2. カリキュラム編成

カリキュラム等編成部会（第1回：7月11日、第2回：10月16日）及び共通教育実施委員会（第1回：5月30日、第2回：7月24日、第3回：10月27日）を経て、令和6年度共通教育科目の開講予定科目数が確定された後、示されたスケジュールに沿って授業題目表の作成およびシラバスの作成が進められた。

次年度の共通教育再編に伴い、開講予定科目決定までの体制に変更があり、基本的方針として、共通教育科目抛出の依頼先を学部ではなく分科会とする形に変更された。そのため、分科会によっては開講予定科目確定までに多くの調整を要したと思われるが、学問基礎論については、開講予定科目数を学部毎の判断に委ねる形が維持された。また、分科会長のみならず各学部の学務（教務）委員長に科目抛出の依頼がなされる形がとられた。そのため、上記の体制変更に伴う影響は少なかったものと思われる。

一方で、次年度の共通教育再編に関連して、大学基礎論と学問基礎論の全学共通コンテン

ツ(動画)が新たに提供されることになった。その方針自体は過年度以前に示されていたが、今年度の第5回共通教育実施委員会(1月29日)においてその概要や使用手引きが確定した。共通コンテンツの完成品は2月末をめどに出揃う予定とされ、それと並行して学問基礎論の授業内容の検討及びシラバス作成を進めることになった。使用方法に関する従来との変更点も幾つか(利用回のシラバスへの明記、設定・評価等の責任体制等)あり、これらについてはシラバス作成及び授業担当者の業務内容との関連において対応していただく形になった。

また、こちらも共通教育再編に伴うものであるが、学問基礎論の実施要領の改訂が検討された。これに関しては、e-ポートフォリオやアカデミックライティング等に関する加筆修正がなされた改定案を共通教育主幹にお示しいただき、第5回共通教育実施委員会(1月29日)で了承された。

3. 自己点検評価活動

授業ごとに必要に応じて受講生アンケートを実施する等による自己点検・評価活動を実施した。それらの例を以下に挙げる。

- (1) 教育学部の学問基礎論(全6クラス)では、「学修 e-ポートフォリオ」を使い、学期末に受講者へのアンケートを実施した。
- (2) 人文社会科学部の社会科学コースでは、当該科目についての授業アンケートおよびFDが実施された。
- (3) 理工学部の情報科学科の学問基礎論は、以下のように実施された：
「これまでと同様に Moodle を使った資料提示や課題提出などを行った上で、対面授業を中心に、一部収録動画を用いた非同期オンライン授業を実施した。理解度を確認する試験を3回に分けて実施することで、学生が授業を受講する姿勢は緊張感を保つことができている。また Moodle に課題を提出していれば3回それぞれの試験の2日前に課題の解答例を閲覧できるようにしたことで、例年より課題の取り組み状況が改善されたように感じた。」
- (4) 農林海洋科学部の農芸化学コースの学問基礎論では、以下のように実施された：
 - ① 一回目はアカデミックライティング(担当：学び創造センター学生支援部門 坂本智香先生)を非同期型オンライン(moodle)で開講した。二回目以降については、学生間のグループワークを中心とした講義(担当教員はオムニバス形式)を行った。農芸化学分野の課題を自ら発見し、情報収集を行い、論理的に説明するためのスキルを習得する講義を行なった。中間発表と最終発表を行い、相互評価も行った。
 - ② 中間発表や最終発表、最終レポートから判断すると、ネットや書物を用いて可能な限り情報収集を行い、さらに教員からの意見を参考にすることで、農芸化学分野における課題をまとめることが出来ていたと考える。また、e-ポートフォリオで行っ

た授業評価アンケートの結果より（回答率 87%）、履修学生の満足度も高かったと判断する。

- (5) 医学部の学問基礎論（医学科及び看護学科）では、コロナ渦になり実施できていなかった受講者アンケートを復活させ、それに基づいて自己点検・評価活動が実施された。（詳細については後述の「5. 補足」を参照のこと。）

2月下旬から3月下旬にかけて、次年度開講予定科目のシラバスの点検・修正・修正確認が行われた。特に今年度は9月のKULASシステム更新に伴い、シラバス形式の変更やチェックリストの変更にも適宜対応する必要があった。学問基礎論については、点検対象となった約20科目ぶを副分科会長（自己点検・自己評価部会）の藤田博一先生に点検していただいた。そのご尽力に感謝したい。

4. FD 活動

それぞれが必要に応じて全学のFD・SD授業参観に参加したり、授業を担当したりすることを通じて、教育の質の改善・向上を試みることにした。分科会での独自のFD企画は昨年度に引き続き行わなかった。

5. 補足

「3. 自己点検評価活動」の(5)で述べた医学部の学問基礎論に関する詳細は以下の通りである。

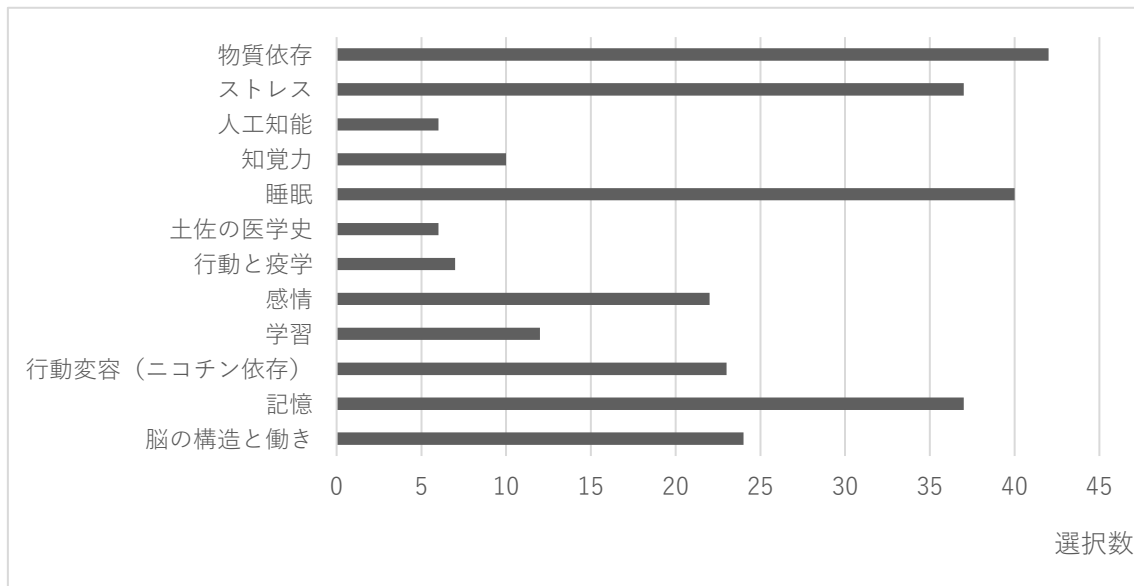
医学科

1) カリキュラムと実施状況の概要

医学教育の質保証を目的とした医学教育分野別評価の中でも重要視されている行動科学をテーマに授業を展開した。具体的には、脳の基本的な構造と働き、記憶、感情、学習、睡眠、行動変容、ストレス、薬物依存など、解剖学、生理学、精神医学、公衆衛生学といった学問領域を扱った授業を行った。また、今年度も引き続き、高知県立高知城歴史博物館館長による、「土佐の医学史」を扱った。授業のスライドは、moodle上でも確認することができるように配慮し、毎回の授業の最後にはmoodle上で小テストを実施、理解度の確認を行った。

2) 自己点検・自己評価の概要

学問基礎論の全カリキュラム修了時にアンケート（109名回答）を実施した。「どの授業に興味を持ちましたか。（複数回答可・必須回答）」の質問の結果は以下の通りとなった。



また、自由記載アンケートも実施した。

「学問基礎論の良かったところは何ですか？」（結果は一部抜粋）

- 一般的な生活基盤と医学との狭間の導入部分のような授業で、分かりやすく為になった。
- この大学生活に生きるようなことばかりだったので、とてもよかった。特に睡眠やストレスは、一人暮らしを始めて特に崩れている部分であったので正しい知識を得ることができてとても良い機会になった。
- 一年で教養科目が多い中、基礎中の基礎ではあるかもしれないが医学的なことを取り扱う授業はとてもモチベーションが上がった。
- ヒトの行動様式や心理状態を医学の知識で説明できるようになり興味深かった。特に脳の仕組みと感情が関連している話が特に自分の興味を惹かれる話題であったので講義で触れて下さり嬉しかった。
- 医学に関わる内容が多く、興味をもって授業にのぞむことができた点。
- 医学生としての知識の入門だけでなく、大学生活で気を付けるべきことをたくさん知れたのでよかった。
- 脳や体の部分といった来年につながる医学の基本的な部分を学習することができました。特に学習の授業では動物を使ってどのように学習されているのかを知ることができ、興味を持ちました。
- 依存性の怖さが理解出来ました。喫煙はその人だけの問題ではなく社会的な問題であることも理解出来ました。
- 各分野の専門の先生方を招いて授業をしていただいたところ
- 大学生になって、行動範囲が広がったことで起きうる危険な問題について、まだ一年生

のうちに学習できたことがよかったです。

- お酒や薬など、高校生までよりも身近になったものに依存するといかに危険かという話が印象的でした。
- 講義内容が身近なものが多く興味深かったです。また書き込み資料を PDF と Word で上げてくださり、書き込みやすくありがたかったです。
- 1年生は医学的な授業が少ないので、学問基礎論で学習できてモチベーションが上がった。
- 薬物依存など自分にとって身近ではないかもしれないが、自分と同世代の人の中には依存者もいるという、全くもって蚊帳の外というわけでもない話題について医学的な知識を織り交ぜながら解説して下さった点。
- 一年生の授業は教養科目が多く退屈だったが、この授業は専門的なこともあり楽しかった。
- 比較的日常にかかわる簡単な医学を知ることができ、痒い所に手が届くような気持ちで講義を受けることができました。特に、感情や学習、睡眠の範囲では勘違いしていた内容などもあったので、改めて学びなおす必要性を感じました。そういう意味で、二年生以降の勉強のモチベーションにつながってよかったなと思います。
- 医学的な学習がほとんどない1年生の授業の中で、大まかな脳のつくりなどを学ぶことができ、よい学習の機会だと思っていました。やりたい勉強と必修でやらなければならない勉強との乖離に悩むことが多いですが、初心を忘れずにいようと思える授業でした。
- 1学年で医学的な授業がほとんどなかったため、医学的な内容にわくわくしました。前後期合わせても1番面白かったです。
- 1年で医学に関する授業がない中、学問基礎論で少しでも医学のことを学べた。医学生としてのモチベーションが下がりそうになる中、このような授業を提供して下さったおかげで、なんとか「自分は医学生なのだ」という自負を持つことができた。
- 行動変容についてなど人間の心理的な部分を知れてよかった。
- 2年生以降の本格的な医学の勉強の土台となるテーマを扱って頂きありがたかったです。
- 日常にかかわっている出来事から自分が全く知らなかったことまで幅広く知識を得られたこと。大事なところを小テストによって知ることができたこと。
- 学問基礎論で学ぶ内容は、今の生活の仕方に直結する話が多く、胸に突き刺さる言葉がたくさんありました。最近友達と勉強したり、ウォーキングに行ったりして、ひとと関わる時間を増やしており、生活が改善しつつあると感じているので、学問基礎論で学んだことを活かして2年生に向けて良い方向に持っていければと思います。
- 初めて医学部に入った実感が湧くような講義科目でした。様々な分野の講義をしていただきましたが、すべて興味深い内容でした。日常生活と関連した具体的な内容が挙げ

られていて良かったです。

- 1年生ではほぼ扱われることのなかった医学系の授業であったことが良かった。高校生物では脳について興味を持ったが、それ以上の興味の惹かれる内容であったのでとてもよかった。
- 日常的に自分たちが触れている部分から医学の初歩的な話に繋がられており、興味を持って授業を受けることができた。

「学問基礎論でどんな内容を扱って欲しいと思いますか？」（一部抜粋）

- 心電図の授業
- 実際の生活で役立つ知識が盛り込まれていると関心を持ちやすい。
- 食生活があるので食に関するトピックも学んでみたいと思った。
- もっと睡眠障害について知りたいです。
- 世の中によくある医療知識の誤解などを正しい対処法と共に紹介する、など。たとえば、「鼻血が出たときに上を向いた方がいい」など。
- 人間関係について学びたいです。
- 依存の話がとても面白かったので、薬物やアルコール依存だけでなく、ネット依存の患者の話など、色々な依存の話について聞いてみたいと思いました。承認欲求の話も聞きたいです。
- 先生がお医者さんとして働いてきた中での経験談や考えなどをもっとお聞きしたかったです。
- もっと専門的な内容を扱っても良い
- このままでいいと思います。
- 医学に関する内容で、まだ詳しく学んでいなくても理解できる内容。また、自らに関連することと結びつけやすい内容。
- 扱った内容はそれぞれ上の学年ではどの科目に対応するのかについてもっと知りたいと感じた。

「改善すべき点はありますか。（回答任意）」（一部抜粋）

- 大学の Wi-Fi がスマホや iPad に繋がらないので不便だった。
- 特にありませんが、小テストの時間を延ばしてほしいと思いました。
- 特にないです。
- 行動科学に限らなくても良い

今年度からコロナ禍前の対面授業に戻った学問基礎論であった。アンケート結果からは、医学科の専門科目を学ぶための準備教育としての「学問基礎論」の目的は十分果たせたと考えている。今後も、医学教育の中で、医療の基本である行動科学教育を更に充実させていき

たい。

看護学科

1) カリキュラムと実施状況の概要

看護学と看護活動の範囲の理解と、看護に関心を持つことを期待するとともに、思考や考えを表現する事を求める授業としている。本年度はすべて対面授業で行い、オムニバス形式で、以下の内容を実施した。

大学で看護学を学ぶ	仲間と学ぶ意義
人を看ることと学ぶこと	女性中心のケア
海外（特にアフリカ）での保健医療活動	看護学の学び方
キャリアについて（卒業生との交流）	看護に必要な社会人基礎力
災害救助活動	仕事と学問
環境と子ども	法律を学ぶ必要性
精神看護学への招待	食と健康
看護学実習について	

2) 自己点検・自己評価の概要

評価は、各授業で行い、1回のみテスト形式で、その他は課題とした。平均点は84.9で秀、優が85%であったが、専門的知識を問う内容でなく、興味を持ったことに関する考えを述べるため、高得点であったと考える。

自由記述の一部抜粋

- さまざまな領域の先生の講義を受けて、将来この分野について学びたいなど、何に自分が興味を持っているのか知ることができてよかった。
- それぞれの専門分野の先生方からのお話を聞くことができるため、自分が興味を持っている分野以外の話も聞け、視野が広がるきっかけになる講義でした。
- 自分の専攻する看護学に関する様々な視点からのお話が聞けて面白かった。
- 看護師になるうえで必要な知識を身に着けることが出来た。
- 大学で学ぶ意味や看護の中身を知れてよかった。
- 今私たちが目を向けるべき医療の問題に直面することができたいい機会になりました。
- 様々な専門的なお話を聞くことができたことから看護学生としての自覚を持ってこれからも学び続けていきたいと感じました。

以上

4 人文分野分科会

人文分野分科会 カリキュラム編成に関する報告

人文分野分科会長 渡邊ひとみ（人文社会科学部）

1) 次年度（令和6年度）に向けたカリキュラム編成

第3回共通教育実施委員会において、次年度の開講予定科目数（案）が提示された。前年度中に分科会において議論・決定した開講科目数であったため、予定通り、人文分野分科会（人文科学系領域分科会）としては計14コマ（人文社会科学部11コマ，教育学部3コマ；センター教員及び非常勤等を除く）を担当することが確認・承認された。なお、「豊かな人間性と高度な専門性を備えた人材の育成」といった本分科会が目指す教育目標や、新体制下での科目区分となる「視野を広げる科目」を意識し、幅広い分野から開講科目を選定した（「哲学」分野から2コマ，「心理学」分野から2コマ，「地理歴史」分野から7コマ，「言語」分野から3コマ）。また，上記14コマに加え，「心理学」分野から演習科目となる「体験で学ぶ心理学研究」も開講する運びとなった。

第3回カリキュラム等編成部会及び第5回共通教育実施委員会において，上記開講科目案が承認された。人文分野分科会は，教員数減少による負担の大きさが依然として大きな課題ではあるものの，ご担当の先生方からのご理解・ご協力を得ながら，無事に開講科目を確定することができた。来年度以降の新体制下では，本分科会から「芸術」科目が新分科会として独立するため，科目内容の多様性確保についてもより一層考えていく必要があるだろう。

2) 今後のカリキュラム編成における課題と展望

2-1. 分科会構成員の把握とカリキュラム編成

共通教育の組織としての体制に曖昧な部分があり，どの学部のどの教員が本分科会メンバーに含まれるのか（構成員）を正確に把握・整理することが難しいという問題点があった。本分科会では，各分野から選出されている先生方のご協力を得て，分科会の構成員や専門分野，着任時期（あるいは退職予定時期）等を把握する作業を独自に行ったが，今後は分科会長が中心となって開講科目数を決定していくことを考慮すると，共通教育が組織全体としての情報管理をすることで，新体制下でのカリキュラム編成をよりスムーズに進めることができるようになるのではないだろうか。

2-2. 教員数減少と教育目標とのバランスについて（前年度からの継続課題）

本分科会においては，「教員数減少とそれに伴う負担増」といった大きな問題を依然とし

て抱えている。本分科会を構成する人文社会科学部では、毎年、共通教育科目をほぼ全員が担当しており、後任不補充による教員数減少の影響を大きく受けた担当体制となっている。ノルマ制廃止により、若干の負担減とはなるものの、他分科会と比較しても負担が大きい状況が続いている。本分科会が掲げる「人間と文化に関わる領域において、幅広い教養科目を提供する」という教育目標の達成と実際の教員資源とのバランス（また、そのバランスのとりかた）について今後も議論していくことが必要である。

2-3. 自己点検・自己評価部会及びFD部会との連携活動について(前年度からの継続課題)

本分科会の自己点検・自己評価部会では、授業の質保証の観点から「公正な成績評価」がなされているかどうかを分析・確認する作業を毎年行っている。またFD部会では、教育に関する学びを促進するためのFD開催や、アンケート調査による分析などを実施しており、今年度は「アフターコロナの授業におけるオンラインツール活用状況」と題したアンケート調査の実施および情報共有を行った。これらの取り組みは教育の質向上に大きく貢献しており、有意義な活動として評価される一方、「各部会としての活動」で終わってしまうことも多く、学生の学びへの還元や毎年のカリキュラム編成との結び付きはあまり意識されていない。したがって、部会を越えた情報の活用・応用を意識的に行うことで、様々な分析結果・知見をカリキュラム編成に活かし、さらには学生と教員の双方にとってのメリットにつなげていく必要がある。つまり、「カリキュラム編成と他部会活動との連携」という視点を持ち、今後のカリキュラム編成に活かしていくことが課題である。

3) 総括

前年度中に令和6年度の開講科目リスト案を作成していたことや、分科会構成員の先生方のご協力もあり、今年度は比較的スムーズにカリキュラム編成の作業を行うことができた。来年度以降は、(1) (上述の) 諸問題に関する議論を継続しながら、新体制下での本分科会の位置づけ・役割を再確認し、(2) 教員側だけでなく、学生のニーズもきちんと把握しながら、質の高い授業を提供できるよう目指す。

学士課程運営委員会「公正な成績評価の実施に向けて（申合せ）」では、「優以上の成績を修める学生の比率は、半分以上を標準とする」という目安が設けられている。本報告では、それがどの程度機能し、授業の質保証が担保されているのか、という観点から現状を確認することを通じて、自己点検・評価作業を行うものである。

令和5年度における人文分野の授業は33科目であった。全学共通教育係から提供された資料をもとに確認した結果、優以上の成績を修める学生の比率が半分以上の授業は、7科目（担当者は6人）であった。ただし、そのうち3科目は「個別の指導」もしくは「双方向」であるという点で、上記申し合わせの例外対象となるので、そこでの目安に抵触するのは、実質4科目となる。すなわち全体の88%を占める29科目は申し合わせに示された目安の範囲内におさまる成績評価を行っていたことになり、このことは、こうしたガイドラインがかなり有効に機能していることを示すものといえるであろう。

その上でさらに、この「目安」を超過した授業担当者（ここでの該当が2科目ある担当者を含むため4科目3人）から、その「理由」ならびにそこでの（成績評価の仕方など）質保証の「工夫」について聞き取りを行った結果を以下に簡単にまとめる（特定を避けるために適宜省略、編集を加えている）。

〔事例1〕

理由：論述試験が単純に知識を問うものではなく、「各個人がそれぞれの立場から講義の内容に対する関心を発見できたか」を評価したことによるものであり、大多数の学生が「優」と評価すべき水準に達していたため。

工夫：講義の中での必要条件となる課外学習を行っていない、試験に遅刻したまたは受験しなかった、まともに作文をしていないなどの受講生には減点方式で「良」以下、特に優れた洞察を行い、独自の学習の深度が深い学生には「秀」をつけた。

〔事例2〕

理由：登録した学生の大半は勉強に熱心に取り組み、それが成績に反映された。選択科目でもあるため、学生のモチベーションが高かったのではないかと。

工夫：総括的な成績評価ではなく、形成的な成績評価システムを採用している。つまり、学生はMoodle上で毎週課題を提出し、それに対して成績評価を行う。学生は最終レポートも書かなければならない。従って、学生はコースを修了するために、比較的多くの採点付き課題をこなさなければならない。また、ここでの出席規定では、学生は12/15の授業に出席する必要がある、これは通常の大学の規定よりも厳しい。

〔事例3〕

理由：試験とレポートの成績が比較的良い学生が多かったため。また（秀と優との割合の超過はわずかであり）許容範囲かと思っていた。

工夫：2回の小レポートと1回の期末試験、毎時の質問（対話授業）に対する回答状況（平常点）で成績評価をした。比重は期末試験が6割、レポートが2割、平常点

が2割。試験は100点満点の記述式（全4問）、レポートは5段階評価、出席回答は3段階評価。試験では赤点者も数名いたので、再試のための再レポートを課し、これらを総合的に判定した。

試験は最終時間（15回目）に実施し、次の時間（試験期間）に答案を返却し解説した。レポートも、そのたびにフィードバックし、授業内で内容の解説をした。以上のことから、知識の面では、一定の質が保たれたのではないかと思う。

思考力についても、毎時間、対話形式で授業を進め、学生の反応や回答を見たことと、試験問題の最後にも内容に関わって、自己の見解を課した。このことから、思考力や対話力についても、一定の力が養われたと考えている。

さらに参考のため、「例外対象」となる授業担当者からも同様の聞き取りを行っている。そこでの回答を以下に箇条書きで示す。

- ・演習(実技)の形式を取っており、学生同士がディスカッションを行い進める、あるいはグループごとに取り組み、それでれが分析を行う、パートリーダーを中心に自分のパートの役割について考える活動などを行っているなど、こういった活動の中で、授業担当者からスキルを学ぶだけではなく、ほとんどの学生が、自らの表現や活動をすることについての学びを深めているものと認識している。
- ・実技中心の授業であり、学生たちは熱心に練習し、授業に取り組んだ
- ・授業中の教員と学生の双方向のやりとりまたは学生同士のディスカッションなどで適切に学生たちの学びを深める取組を行っており、出席日数等で問題がない限り受講生の評価は高いものとなっている。

以上に見てきたように、これらの「超過」あるいは「例外」事例においても、総じて担当者はそれぞれの厳正な基準のもと、質保証のための取り組みを行っていたことが確認された。その中には頭の下がる思いの努力も少なくない「授業の仕方を工夫して、その結果として多くの学生が高い成績をおさめる」ことは本来授業のあり方として望ましいものであるといえる。もとより、優秀な成績の濫発がなされぬように備えることは重要であり、それこそがまさにこの自己点検・評価活動が行われる所以でもあるが、今回ここまでに見てきた状況は、授業の質保証という観点からするならば、比較的健全なあり方を示していると見ることはできるのではなかろうか。

なお、次年度から本分野より芸術分野が分離することとなる。実技系で双方向、個別指導などで「例外対象」となることの比較的多いこの分野の授業が移行する中、引き続き分析を継続してゆくこととしたい。

令和5年度 共通教育（人文分野）FD活動 アンケート集計結果のまとめ

担当 阿部鉄太郎

本年度より社会状況はアフターコロナとなり、本学の授業も「講義」を除いては「対面授業を基本にする事」となった。その中で、通常の対面授業のみをおこなう教員の他、オンライン授業のメリットをいかしたハイブリッド型授業（対面授業+オンライン授業）を選ぶ教員や、授業をメディア授業科目に設定する教員もいるなど、授業の実施形態は多様化している。そこで、共通教育（人文分野）FD部会では、教員の開講する（今後開講予定の）授業の実施形態や、それによる授業効果等をアンケート調査し、集計結果を共有することで、アフターコロナでの効果的な授業方法など各々の授業改善をはかることとした。

方法は以下の通り。内容は当初計画通りであり、アンケート調査とその集計結果の紙上での共有を中心とする活動であるため、事業経費の使用はなかった。

- ① 共通教育（人文分野）に所属する教員にアンケート形式で実態を報告してもらう。
- ② 集計結果を後日先生方と紙上で共有し、各々が今後の授業方法などの改善にいかす。

アンケートの質問内容として大まかに以下の4項目を設定し（全体では13項目）、話題とした。

1. 共通教育の授業の実施形態について
2. そのようにする理由について
3. アフターコロナにおいて、その実施形態にしたことで得られた授業効果について
4. 今後の授業形態の変更予定について

これに対する回答として、対面形式のみの授業では、「授業では様々な道具を使用します。オンラインだと各学生で準備する必要がありますし、一人ではできない工程などがあるので対面で実施しています。」「他の学生の進捗状況を肌で確認することができ、新しい発見や難しいことなどを共有できるため、一体感が生まれると思います。」という、実技系授業の事情がうかがえた。

ハイブリット型授業では、「基本は対面で、希望があればオンライン併用。対面が苦手な学生への配慮。」「コロナがまだ不安視される中、風邪や体調不良で登校できない学生にとっては、在宅で受講できるオンライン形式の授業をはさむことで、受講機会が保証される。」という回答があった。オンラインツールは Teams・Zoom と moodle の併用が多くみられた。

メディア授業科目では、「物部開講科目としての対応」「改修工事への対応」「多忙化する学生への負担軽減」「学生の学習速度に合わせられる（繰り返し復習ができる点）」

「教室キャパへの対応」「ここ数年で学びかたが多様化したため、アフターコロナにおいても、個々の学生の学習スタイルや生活スタイルに合わせて、このような柔軟な学びかたがひとつの選択肢としてあっても良いのではないかと思います。とくに、「講義を何度も観直せる」というのが最大の利点で、復習したい時あるいは一度の話では理解が難しい時にとっても役立っているようです（学期中は各回の講義動画はいつでも視聴可能にしております）。」「受講人数が多い場合に、板書が見えにくいなどのことがない。教員にとって、朝倉と物部簡の移動がなく、負担が小さい→荷物になるものは持って行きにくい（プリント類）ので、オンラインであれば豊富な資料を提示できる。」「図表等資料やインターネットベースのソフトウェアを多用する講義形式の授業のため、パソコン画面を介した授業は資料の読み取りとそれに基づく授業参加に効果的であると考えている。なお、担当授業は、同期型オンライン授業形式で、対面授業と同等の双方向性を意識して実施している。このほか、物部開講科目のように他キャンパスで授業を実施する場合、メディア授業科目として申請することで別のキャンパスの受講機会も生まれる（実際に物部キャンパスの学生だけでなく朝倉キャンパスの学生も受講している）。」などの回答があった。

共通教育（人文分野）では、一口に授業といっても、講義・演習・実技（芸術系）など実施形態が異なり、また各形態の中でも授業の進め方は千差万別であることから、必ずしもオンライン教育をアフターコロナで活用すべきであるとはいいきれないが、今回のアンケート調査からは、ハイブリッド型授業やメディア授業科目でオンラインツールをいかして授業効果を高める実例が複数確認された。

以上

令和5年度共通教育人文分野 FD 活動 アンケート集計結果

(回答数:13 件)

1. ご担当されている（今後ご担当予定の）共通教育の授業形態について教えてください。

詳細

● 講義	9
● 演習	2
● 実技	2
● その他	0



2. ご担当されている（今後ご担当予定の）共通教育の授業の実施形式を教えてください。

詳細

🔍 インサイト

● 対面授業のみ	4
● ハイブリッド型授業（対面授業+オ...	3
● メディア授業科目へ登録している（...	6
● その他	0



3. 質問 2 で「対面授業のみ」を選択された方にお聞きします。そのようにされた（される）理由についてお聞かせください。

回答

実技内容が含まれているため。

授業では様々な道具を使用します。オンラインだと各学生で準備する必要がありますし、一人ではできない工程などがあるので対面で実施しています。

moodleを使った反転授業を行なっているため、講義日は基本的に対面で行なっている。

特に理由はありません。対面が基本の形式とっております。

4. 質問 2 で「対面授業のみ」を選択された方にお聞きします。アフターコロナにおいて「対面授業のみ」をおこなった（おこなう）ことで得られた（得られる）授業効果を教えてください。

回答

実技能力のアップにつながるため。

他の学生の進捗状況を肌で確認することができ、新しい発見や難しいことなどを共有できるため、一体感が生まれると思います。

流れの中で、演習（実技）を柔軟に盛り込みやすい。

これも特に得られたこととして実感したことはありません。参考までにコロナの間も対面許可申請をした上で、対面で授業を継続しておりました。

5. 質問2で「対面授業のみ」を選択された方にお聞きします。今後オンラインツールを取り入れた授業に移行する予定はありますか？

詳細

● 予定がある	0
● 予定はない	1
● わからない	2
● その他	1



6. 質問2で「ハイブリッド型授業」を選択された方にお聞きします。そのようにされた(される)理由についてお聞かせください。

回答

基本は対面で、希望があればオンライン併用。対面が苦手な学生への配慮。

入院の三回分をオンライン非同期で補いました。

PCでの資料の提示がしやすい。

7. 質問2で「ハイブリッド型授業」を選択された方にお聞きします。対面授業とオンライン授業の割合について教えてください。(※15回の授業のうち、対面：オンラインの割合です。)

詳細

● 対面8：オンライン7	0
● 対面9：オンライン6	0
● 対面10：オンライン5	0
● 対面11：オンライン4	1
● 対面12：オンライン3	1
● 対面13：オンライン2	0
● 対面14：オンライン1	0
● その他	1



8. 質問2で「ハイブリッド型授業」を選択された方にお聞きします。オンライン授業の実施状況（実施予定）について教えてください。

詳細

● オンライン（同期型）で実施した（...	2
● オンライン（非同期型）で実施した...	1
● オンライン（同期型・非同期型の両...	0
● その他	0



9. 質問2で「ハイブリッド型授業」を選択された方にお聞きします。活用した（する）オンラインツールについて教えてください。※複数回答可

詳細

● Teams	2
● zoom	1
● moodle	2
● YouTube	0
● その他	0



10. 質問 2 で「ハイブリッド型授業」を選択された方にお聞きします。アフターコロナにおいてハイブリッド型授業をおこなった(おこなう)ことで得られた(得られる)授業効果を教えてください。

回答

対面が苦手な学生への配慮。基本は対面。

6で回答した事態となって、休講や補講を回避することができた

コロナがまだ不安視される中、風邪や体調不良で登校できない学生にとっては、在宅で受講できるオンライン形式の授業をはさむことで、受講機会が保証される。

11. 質問 2 で「メディア授業科目」を選択された方にお聞きします。そのようにされた(される)理由についてお聞かせください。

回答

今年度、物部開講科目のため。移動が大変だから。

学部棟改修工事による教室不足により、強制的に選択した

動画配信型の授業を実施しております。この形式でしたら、数多くの学生が受講してもこちらが対応できます。また、動画を数日配信することで学生も都合のよい時に視聴できますし、何回も見直すこともできるからです。

毎年、履修者が非常に多いためです。(1) 収容できる教室がない、(2) 学生にはできるだけ希望通りに科目履修をしてもらいたい、の2点から、メディア科目登録をしています。

受講生が多く(約200人)、教室確保が難しいかったから。

物部開講科目のため ※当初は対面を予定していたが、共通教育係からメディア授業科目の申請をしないのが問い合わせがあったため、メディア授業科目に変更した。

12.質問2で「メディア授業科目」を選択された方にお聞きします。アフターコロナにおいて「メディア授業科目」として講義をおこなった(おこなう)ことで得られた(得られる)授業効果を教えてください。

回答

受講人数が多い場合に、板書が見えにくいなどのことがない。教員にとって、朝倉と物部簡の移動がなく、負担が小さい一荷物になるものは持って行きにくい（プリント類）ので、オンラインであれば豊富な資料を提示できる。

動画配信形式なので、講義そのものを学生が繰り返し視聴できる。内容理解や復習に利点がある。

上記にも書きましたが、動画を何回も見直している学生がいます。学生のペースで授業を受けることもできますし、分からない部分は見直すこともできます。復習もできるのではないかと考えています。

ここ数年で学びかたが多様化したため、アフターコロナにおいても、個々の学生の学習スタイルや生活スタイルに合わせて、このような柔軟な学びかたがひとつの選択肢としてあっても良いのではないかと思います。とくに、「講義を何度も観直せる」というのが最大の利点で、復習したい時あるいは一度の話では理解が難しい時にとっても役立っているようです（学期中は各回の講義動画はいつでも視聴可能にしております）。

授業動画の視聴する形で授業を行っているが、学生からの意見としては、自分のペースで履修できること、わかりにくいところを改めて見て確認できること、休んだりした場合でも復習がしやすいこと、などがあった。授業だけでなくいろいろな面で学生の負担が増えているなかで、自分のペースで学ぶことができるメディア授業科目が一定数あることは、その授業にとっただけでなく、学生の学び全体としても、一定の意義があると思う。

図表等資料やインターネットベースのソフトウェアを多用する講義形式の授業のため、パソコン画面を介した授業は資料の読み取りとそれに基づく授業参加に効果的であると考えている。なお、担当授業は、同期型オンライン授業形式で、対面授業と同等の双方向性を意識して実施している。このほか、物部開講科目のように他キャンパスで授業を実施する場合、メディア授業科目として申請することで別のキャンパスの受講機会も生まれる（実際に物部キャンパスの学生だけでなく朝倉キャンパスの学生も受講している）。

13. 第16回目の授業（試験等）の実施形式について教えてください。

詳細

● 対面試験	0
● オンライン試験	2
● レポート課題	9
● その他	2



5 社会分野分科会

令和5年度 社会分野分科会・カリキュラム編成に関する報告

社会分野分科会長
新井泰弘（人文社会科学部）

◆カリキュラム編成

カリキュラム編成の経過（令和5年10月～令和6年1月）

全開講数32コマの内訳として、人文16、教育3、地域協働13（他分野を含む）と決定した。社会分野を担当する人文社会科学部（社会科学コース、国際社会コース）、教育学部、地域協働学部に次年度担当体制について依頼をし、担当者および時間割を調整・決定した。また、別途センター所属教員に次年度担当体制について依頼を行い、時間割を調整・決定して頂いた。各学部等の協力を得て多様な科目のカリキュラムを編成できた。

◆自己点検・評価活動（令和6年2月～3月）

次年度シラバスチェックを実施中である。KULASシステムのリニューアルに伴い、シラバスの様式や記入項目等が変更になったため混乱が予想されたが、これまでのところ比較的軽微な修正のみであり、記載方法に関する理解が浸透してきていると想像される。引き続き、最終チェックを行い、点検結果報告書を提出予定である。（令和6年3月12日時点）

◆FD活動

令和5年度は独自のFD企画は行わず、必要に応じて他分科会などのFDに参加した。

6 自然分野分科会

自然分野分科会会長 加藤 治一（理工学部）

1. 自然分野分科会の運営体制

本年度の自然分野の教育目標は、昨年度と同様に、「自然科学に関する基礎的な知識、方法および思考法を習得し、それらを基盤とした自発的な探求力、深い洞察力および論理的な思考力を育成する」ことである。これを実現するために、自己点検評価活動やFDとも連動して、カリキュラム等編成に関する課題を点検し、編成作業を進めてきた。なお、分科会委員への情報周知や協議・作業依頼に関しては、原則としてメール会議で実施した。

本年度の自然分野分科会は次に示す13名の委員で構成される。自己点検評価担当の分科会副会長には教育学部の西脇芳典委員が、FD担当の分科会副会長には農林海洋学部の加藤伸一郎委員がそれぞれ選出された。

【自然分野分科会委員】

分科会会長：加藤治一、分科会副会長（自己点検評価担当）：西脇芳典、分科会副会長（FD担当）：加藤伸一郎

その他の委員：加納理成（教育学部）、三角淳・藤代史・松本健司・宇田幸司・川畑博・老川稔（理工学部）、関安孝（医学部）、橋本直之・小河脩平（農林海洋科学部）

2. 令和6年度カリキュラム等編成

令和6年度から共通教育が再編されることを受け、カリキュラム編成作業も例年から若干の変更があった。具体的には次のような手続きで行われた。第1回カリキュラム等編成部会（7月6日開催）において、昨年度の科目等編成グループの答申から“昨年度時点でのR6の開講予定コマ数”が確認された。この時点で提示されたコマ数は自然科学分野全体で42であった。その後、第2回共通教育実施委員会（7月24日開催）での報告を経て、改めて分科会にR6開講科目の確認をするよう依頼があった（8月21日）。ここで教務から提示された科目数は分野通じて46であった。内訳は理工学部18（知プラ科目含む）、農林海洋学部9、教育学部5、センター担当他科目14である。（なお第1回カリキュラム等編成部会のものと異なる理由は知プラ科目・センター担当科目などにおけるカウントの差異などである。）このうち学部担当科目について、分科会長・副会長を通じて各学部に関わせたところ開講科目数に関する異存はなかった。教務を通じてその旨を報告（9/19）し、またセンター担当分は教務から担当者へ直接確認を行っていただいた結果として、第2回カリキュラム編成部会（10/16）・第3回共通教育実施委員会（10/27）を経て、令和6年度自然分野の開講コマ数が決定された。学部担当分29、センター等担当分12、知プラ科目27の計68となる。この担当体制に基づき令和6年度のカリキュラム等編成作業を開始した。各科目の担当教員・開講時限等について、学部担当科目については分科会長・副会長を通

じて、センター教員が担当する科目は教務から担当者へ直接、確認作業を行った。このようにして編成された科目は第 3 回カリキュラム編成部会（1/15）に提出され、原案どおり承認された。

本年度からの主な変更点は以下の通りである。

【新規開講】

- ・ 大学数学へのいざない

【廃止】

- ・ 微分積分学入門

【開講せず】

- ・ 高知の自然と地質資源

【開講形態の変更】

- ・ 物理学入門
- ・ 化学入門
- ・ 生物学入門
- ・ 地球科学入門

以上 4 科目については通年開講 2 単位→半期開講 1 単位とした。各々担当教員も変更されている。

【科目名変更】

- ・ 花粉を科学する→生活の中の植物・菌類（※開講時限も変更）

【担当教員の変更】

物質の科学、フードサイエンスの世界、地球の農林資源と海洋科学、土佐の自然と農林業、高知の最先端農業 IoP 入門セミナー、ライフサイエンスの世界、データ農業をやってみよう！IoP サマースクール、次世代農業を感じてみよう！IoP スプリングスクール

※旧共通専門科目のうち、化学概論 80913 は廃止

3. 自己点検・自己評価

内部質保証体制の構築に関連し、第 1 回共通教育自己点検・自己評価部会（1/12）にて各部会に対し、昨年度に引き続いてシラバスチェックを実施するよう依頼があった。自然分科会では、自己点検・自己評価担当の副分科会長（西脇）が担当し、いくつかの科目のシラバスについて不備を自己点検・自己評価部会に報告した。なお、本年度のシラバスチェックは西脇先生が一手に担っていただく形になり、負担が集中した。分科会としての体制作りとともに、教員が行う業務の検討・精選やその効率化が必要であると考えた。

4. FD 活動

自己点検・自己評価の項にあるような内部質保証体制の構築について委員間で意見交換を行った。

第 5 回共通教育実施委員会（1/22）にて、来年度の分科会構成委員の体制について改正案が提示された。学部ごとに分科会に委員を出す、自然分野に対する人数を、理工学部 1、教育学部 2、農林海洋学部 3、医学部 1 としようとするものである（旧来は、理工学部 7、教育学部 2、農林海洋学部 4、医学部 1）。本件を分科会長・副会長の間で議論し、原案通りで進めることとした。

なお本年度は自然分野分科会として独自の FD 講演会などは開催しなかった。

5. その他

令和 5 年度の成績評価分布について要請があれば分析を行う。（3 月現在）

7 医療・スポーツ科学分科会

令和5年度 医療・スポーツ分科会 活動報告書

【カリキュラム編成部会】

幸 篤武（教育学部）

令和6年度カリキュラム編成

令和6年度のカリキュラム編成は次の通り行われた。まず各科目の履修者数の確認を行うこととした。その結果科目による増減は認められるものの、概ね過年度と同様の履修傾向が認められた。よって令和6年度の開講コマ数は前年度（令和5年度）と同等とすることを基本方針とした。これについて分科会委員に意見を求めたところ、異論はなく了承を得たため、令和5年度の開講コマ数を基にカリキュラム編成を行った。なおその過程において、実技科目を担当していた非常勤講師が県外へ転出することとなった。そのためその所属先の後任者に科目をそのまま引き継ぐこととなった。

課題について

スポーツ科学実技・講義のどちらも非常勤講師が多くの科目を担ってもらっている。一方で、これまでと同様に、高知県内に非常勤講師として担当できる人材が極めて少ないという実情がある。現在の科目担当者の中には、70歳を超えている非常勤講師もあり、令和7年度以降は開講コマ数を減らさざるを得ない現状にあることが分科会委員の間で確認された。そしてその場合においては、物部キャンパス開講科目がその対象となり得る、という具体的な意見が出された。

【自己点検・評価部会】

生命・医療分科会自己点検・評価部会 吉村澄佳（医学部）

1. 令和5年度「健康」

本年度の「健康」の授業は、昨年度同様に非対面授業での開講であった。A・Dの4クラスでの授業後に、履修学生を対象として1学期に授業評価アンケートを実施した。質問内容は、学部、学年、性別、授業内容の評価12項目と授業を受けて自身への影響3項目の計15項目、および自由記載である。回答数はAクラス：85人、Bクラス：22人、Cクラス：54人、Dクラス：86人、計247人であった。

1) 回答者の特徴

アンケート回答者の所属する学部別にA・Dの受講クラスを示す（表1）。回答者数はクラスにより学部に偏りがあった。回答者は1年生が最も多く151人(61%)であった。受講生の男女比は、ほぼ同等であった。

表1. 学部別・クラス別の回答者数

	A	B	C	D
総回答者数	85	22	54	86
学部:				
人文	45	12	0	2
教育	2	0	14	20
理工	15	0	2	13
農	4	1	0	1
地域協働	2	0	14	17
医	17	9	0	33
TSP	0	0	0	0

2) クラス別授業評価15項目の結果

評価指標15項目の結果をクラス別に示す（図1）。項目1-12は授業内容の関する項目であり、項目1-7は教員の準備状況や取り組みに関する内容、項目8-12は学生の授業への関心や満足に関する内容である。項目A-Cは授業による学生への影響を問う内容である。

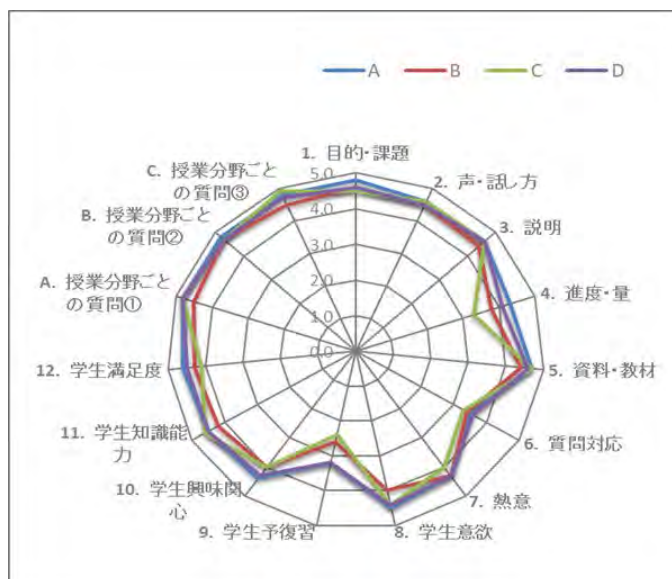


図1. クラス別による授業評価15項目の得点結果

項目 1-12 のいずれにおいても、各クラスでの大きな隔たりはなかった。項目 1-7 の教員の取り組みは平均点が 2 項目（項目 4, 項目 6）を除いて 4 点以上であり、昨年同様に高い評価であった。項目 4 の [授業の進み方や内容が適切か] は、2 クラスで平均点が 3 点台であり、対面授業ではないことが影響していると考えられる。加えて、これに関連する内容も他項目に比して学生評価が低い。項目 6 [教員は、受講生が質問や意見を述べる機会をつくりそれらに答えているか] である。学生の理解度の評価や効果的な意見交換の方法を検討することは重要であり非対面授業での課題である。項目 8-12 の学生の授業への関心や満足の質問においては、学生の予習復習状況を除いて平均得点は高かった。

授業内容が学生に及ぼす影響についての質問項目 A-C は、各クラスとも高い評価であった。受講生は「健康」を受講することで健康への関心や理解を深め、学生自らの健康を振り返り、今後の生活の参考にしようと考えていることが明らかとなった。本授業は健康に関する話題を各分野の講師から学び、学生が健康についての多角的な捉えや知識を得る機会であったと考える。

3) 自由記載のまとめ

自由記載への回答は、授業内容で健康に対する関心が高まり、得た知識を生活の中に取り入れたい、との記載が多くあった。その背景には、多彩な講師による多角的な方面からの健康に関する内容が効果的であったという回答から学生の関心が高まったと考える。加えて、データを使用した根拠がわかる講義内容であったことが、実践意欲につながったとの記載もあった。更に様々な分野からの話を聞くことで、自分の身体を大切にしていきたいと思ったという回答があり、自分の健康について考える機会となったようである。

授業方法についての記載は、対面授業の希望があった。また、課題については、課題に取り組むことで自身の生活の見直しや知識の深まりにつながった、という回答があった。しかし、提出期限や方法が明確でなく困ったという意見もあった。

4) まとめ

本年度は例年どおり非対面での授業形態であった。各クラスとも学生は健康への理解を深め、改めて自身の健康を考える機会とし今後の生活に活かしていこうと考えていた。よって、学生の健康に対する認識を高め、疾病を回避し健康に生活するための予防行動や対処行動につながることを期待できる。

【FD 部会】

医療・スポーツ分科会 FD 部会 宮本隆信（教育学部）

1. FD 部会報告

R5 年度活動計画に沿って、FD 研修（R6.3.15）を実施した。スポーツ科学実技種目されているローンズボール（川本真浩教授）を題材として分科会長幸 篤武先生、FD 部会宮本隆信、授業担当者である川本真浩先生の 3 人で、ボール競技における動作、ボール軌跡などのリアルタイム・フィードバックのシステム構築について、検討した。

具体的には、体育館 2 階に WEB カメラを設置し、ボールの軌跡や学生のフォーム、フロア全体の画像を 1 階フロアの大型映像（55 型テレビ）に投影し、学生にフィードバックするというものである。実際には、Wi-fi の接続可能範囲が限定され、WEB カメラから 10～20m 程度の距離までなら可能であった。映像自体は、鮮明な画像で、動きもスムーズであり、スポーツ科学実技、特にボールを取り扱う屋内競技での即時的フィードバックシステムとしての可能性の広がりを感じるものであった。また Teams を活用して、ノート PC やタブレットのカメラを活用することによるカメラの多角的映像共有などの可能性もあることが確認された。

ただし、課題もいくつかみつき、Wi-fi 環境の充実や、2 階の電源確保（現時点において 2 階に電源設備なし）、フロアでの大型テレビの設置台数、設置場所、設置準備の手間を簡便に実施する手立てを考えることが必要である。

しかしながら、スポーツ科学実技として、スポーツを実施して楽しむだけでなく新たなスポーツの楽しさに触れることのできる機会となる可能性がみられた点は、有益であった。今後もこれらの新しいスポーツ実技の在り方については、さらに検討を深めていくことも重要となっていくと考えられる。

8 外国語分科会

カリキュラム編成 西尾 美穂
自己評価・自己点検活動 高橋 俊
FD 活動 土屋 京子

1. カリキュラム編成

現在、人文社会科学部の外国語担当教員は、全員が年間4コマ以上の外国語の授業を開講している。これは、外国語担当教員だけでなく人文社会科学部全体としても専任教員の人数が減少し、専門教育や校務の負担が増している中で、非常な負担となっている。教育のレベルを維持しつつ、教員の過剰な負担を解消するため、初修外国語や英会話のように時間数と手厚い指導が必要な部分では現状を維持しつつ、高等学校までの学習の積み重ねがある英語の読解のような分野では、学生の授業時間外学習への取り組みを促し、自律的な学修へ移行していくことが望ましい。そのため、令和6年度からは大学英語入門の授業は（再履修クラスを除き）1学期のみとするカリキュラムの改変を行った。

2. 自己評価・自己点検活動

共通教育外国語分科会自己点検評価部会では、1学期・2学期の期末試験終了後に受講生へのアンケートを実施し、前期は1,140件、後期は801件の回答があった。以下、気づいた点を列挙していく。

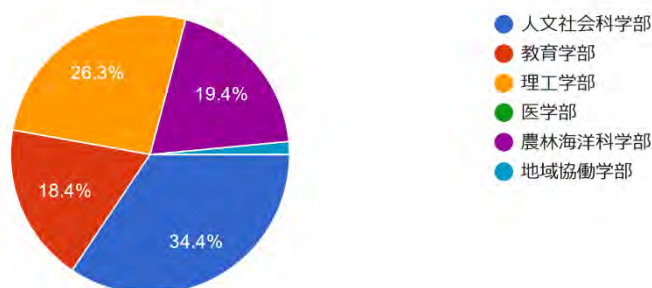
- ・回答数が徐々に少なくなっているのが気付きである。
- ・個別のコメントは、ほとんどが好意的なものであった。
- ・あえていえば、シラバスについて、相対的にやや厳しい評価だったと思われる。

今後も継続してアンケートをとり、授業の改善に役立てていく予定である。

アンケートが大部になるため、本報告書には2学期分のみ掲載する。

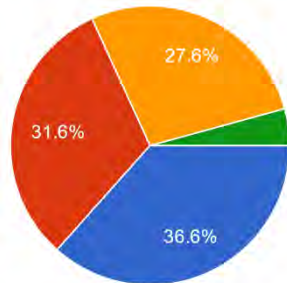
あなたの所属を下記から選んでください。

799件の回答



問1 あなたが受講した授業（このアンケートの対象となる授業）は次のどれですか。

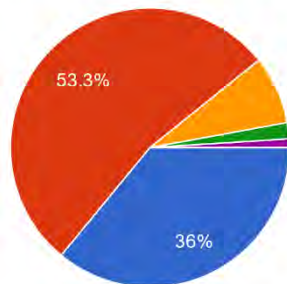
798 件の回答



- 大学英語入門
- 英会話
- 初修外国語 (ドイツ語、フランス語、...)
- それ以外 (TOEIC英語等)

問2 シラバスの到達目標は達成できましたか。

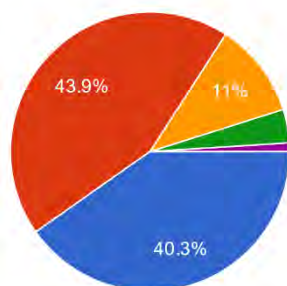
798 件の回答



- きちんと達成できた
- やや達成できた
- どちらともいえない
- あまり達成できなかった
- まったく達成できなかった

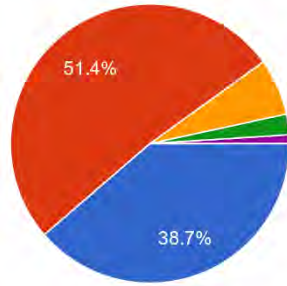
問3 シラバスは授業の履修に役に立ちましたか。

800 件の回答



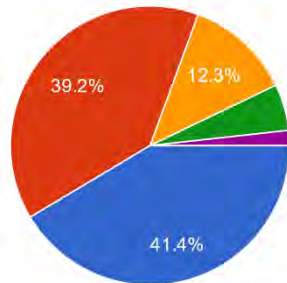
- とても役に立った
- やや役に立った
- どちらともいえない
- あまり役に立たなかった
- まったく役に立たなかった

問4 授業はどのくらい理解できましたか。
794 件の回答



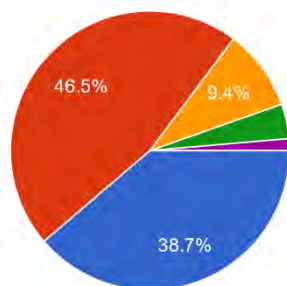
- ほとんど理解できた
- おおむね理解できた
- どちらともいえない
- あまり理解できなかった
- まったく理解できなかった

問5 受講した外国語への学習意欲は高まりましたか。
799 件の回答



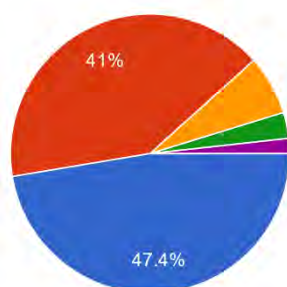
- とても高まった
- やや高まった
- どちらともいえない
- あまり高まらなかった
- まったく高まらなかった

問6 授業の難易度は適切でしたか。
798 件の回答



- きわめて適切だった
- 適切だった
- どちらともいえない
- あまり適切ではなかった
- まったく適切ではなかった

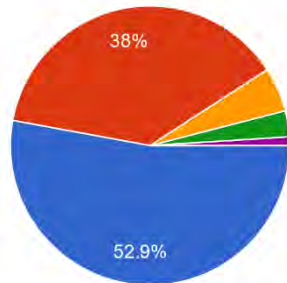
問7 この授業に満足しましたか。
798 件の回答



- とても満足した
- おおむね満足した
- どちらともいえない
- あまり満足しなかった
- まったく満足しなかった

問8 授業の進度は適切でしたか。

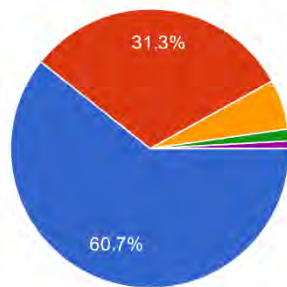
798 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまりあまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問9 教科書や配布資料の使われ方は適切でしたか。

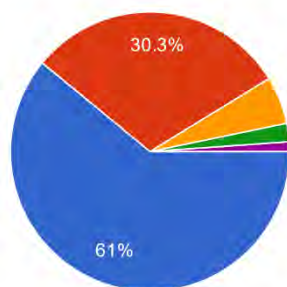
796 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまりあまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問10 教員の話し方は適切でしたか。

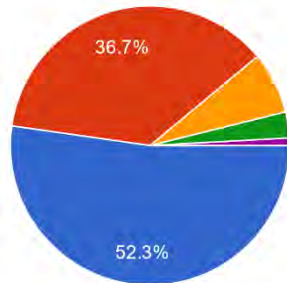
799 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまりあまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問11 板書や資料提示は適切でしたか。

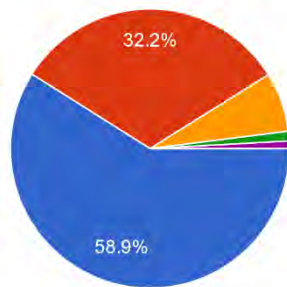
798 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまりあまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問12 意見や質問への対応は適切でしたか。

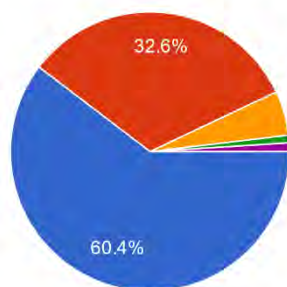
799 件の回答



- とても適切だった
- おおむね適切だった
- どちらともいえない
- あまり適切でなかった
- まったく適切でなかった

問13 教員は熱意をもって授業に取り組んでいましたか。

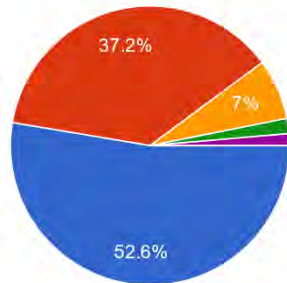
797 件の回答



- とても熱意をもって
- 熱意をもって
- どちらともいえない
- あまり熱意をもっていなかった
- まったく熱意をもっていなかった

問14 中間試験や期末試験の出題内容は適切でしたか。

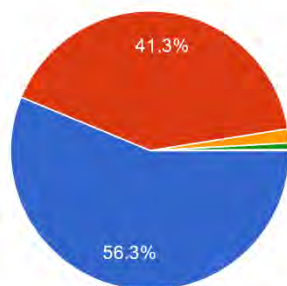
798 件の回答



- とても適切だった
- 適切だった
- どちらともいえない
- あまり適切ではなかった
- まったく適切ではなかった

問15 授業にどの程度出席しましたか。

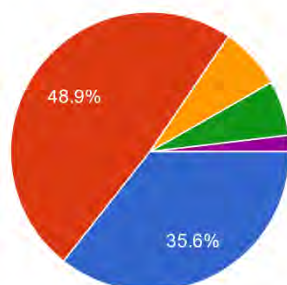
800 件の回答



- すべて出席した
- おおむね出席した
- どちらともいえない
- あまり出席しなかった
- まったく出席しなかった

問16 受講した言語に関して自己学習（授業の予...試験準備以外の学習）をどの程度行いましたか。

800 件の回答



- 努力して自己学習に励んだ
- 多少自己学習に取り組んだ
- どちらともいえない
- あまり自己学習はしなかった
- まったく自己学習はしなかった

問 17 回答した授業に関する意見やコメントを自由に書いてください。

- ・楽しかったです！
- ・英語を仲間たちと楽しく学ぶことができた
- ・わかりやすかった
- ・とても楽しい授業だった。
- ・わかりやすかった
- ・難しい単語が多かった。特に専門語彙の英語がわからないところが多かった。
- ・英会話なのに会話を取り入れたものが期末試験しか無かった。会話を上達するために学びに来たのにがっかりした。大学英語入門ですかと不思議に思った。英会話の先生の声が小さすぎて何を言っているのか理解できなかった。
- ・中間テストの採点方法を見直して欲しい。
- ・英語への意欲が高まった
- ・教科書の内容を理解していくのが楽しかったです。
- ・テストの範囲が広がった
- ・各先生によって難しさなどが変わるのは良く無いです。
- ・英語の成り立ちについて学習した。初めはすごく難しい内容だなと思っていたが、だんだんと英語の成り立ちについて学習するのがたのしくなってきた
- ・先生が優しかった。
- ・とても楽しく学べる授業で充実していました。
- ・抽選で決まるにも関わらず、定期試験がないクラスがあるなど先生によって難易度や課されるものの差がありすぎるのはどうかと思う。
- ・授業を受け、それを復習するという繰り返しにより、英語力が少しはついたのではないかと思った。
- ・TOEIC 対策に取り組むきっかけになりました。ありがとうございました。今後も TOEIC の勉強に励みたいと思います。
- ・クラスが成績別に振り分けられました。周りのみんなが英語が上手なので、自分が場違いな感じがして少し辛かったです。
- ・以前は英語に苦手意識があったが、最近は苦手意識があまりなくなった。授業を通して新しい英語の勉強方法を見つけることができたので実践していきたい。
- ・他者と英会話をする機会はあまりないため面白かった。
- ・身近な英会話が多くて、会話しやすかった。
- ・この講義を受けて最も良かったと思うことは、わからない英単語を収集&記録するくせがついたことです。
- ・教科書をしっかり利用していたため、自習がしやすかった。
- ・理解できるときとできないときそれぞれが多くあった
- ・中国語は触れる機会が少なく、自ら勉強する時間が短かった。

・具体的な例文を学んでからそれをもとに実践して英会話に挑みたい。映画の観賞がとても良かった。

・英語以外の外国語を学ぶ機会になりました。もっと伸ばしていきたいです。

・英会話に対する興味関心が高まった。

・teams で課題や資料が配布されるため、整理がしやすかった。

・〇〇先生は不適切な発言が多々見られました。

・予習課題の分量が少し多かった。

・中国語だけではなく、いろいろな中国の文化も学ぶことができ、とても充実した授業だった。

・初めて学ぶ言語でわからないことがほとんどだったが、指導教員の丁寧かつわかりやすい授業のおかげで、授業内容を理解することができ、その言語に対しての学習意欲が高まった。

・英語でのペアワークが多かったのも、英語で会話するという前に前より圧迫感が無くなって良かったです。

・松岡碧水先生の授業本当に良かったです。

・分からない所は、英語で簡単な所からヒントを出して下さるのがとても良かったです。

・改めて英語を学べてよかった。

・会話でのテストは緊張したが、自分の話したいことを話せてよかった。

・英語について、問題を解くよりは問題を解く方法や仕組みについて学べてとても面白かったです。

・英語だけでなく外国の文化や常識を知ることができてタメになりました。テスト内容も先生が重要だと思うものを厳選して出されていたので、優先順位をつけて勉強ができました。周りの人とコミュニケーションをとる時間が多く楽しい授業だった

・わかりやすく教えてくれたので学ぶ意欲もプラスになった気がする。

・はじめて学ぶ言語でとても興味深い授業だった

・テストも事前にどの課題があるかを提示してくれていたのも、授業フレーズをどのように使おうか考えることができた。その際わからない単語や表現を新しく知ること、フレーズも覚えることができました。

・TOIEC 英語のシラバスに書いてあるメールアドレスで教授に連絡がつかない。

・1年間を通して良い学びをすることが出来た。

・英会話を通して英語を話す機会が作れて良かった。

・実力がついたと思う

・楽しい授業をありがとうございました

・池老師謝謝

・授業の進度や内容がちょうどよく、無理なく進めることができた。

・もう少しクラスの一人一人が関わりを深められる活動が欲しかった。

・英会話の授業なのでもう少し会話をする時間がほしいと感じた。

- ・英語はあまり得意ではないが、授業での解説がわかりやすくよかった。
- ・非常に丁寧な解説で、音声や映像・配布プリント等の資料も豊富だったため理解を深めることができたと感じている。
- ・授業で中国語の曲を聞き、曲の中で出てきた文法の解説が良かったです。
- ・分からない時はきちんと教えてくれた。
- ・楽しく授業をしてくださり、良かった。
- ・日本語と違う言語の知識をつけることができた。
- ・前期に引き続き真面目に取り組むことができた。
- ・中国語に関する興味が湧きました。観光地で中国語を耳にして、聞き取れた時は嬉しかったです。
- ・苦手だった英語を楽しく学ぶことができました！とても面白かったです！
- ・楽しく学べる授業で非常にためになりました。
- ・自分が他の人との交流が苦手な事をすぐに察知してくれ、1人でもできるように課題の内容を工夫してもらったり、話す相手がいないときはペアとしてかわりにたいおうしてくれたりとてもお世話になりました。
- ・英語に対する苦手意識は大きかったです、頑張ろうと思いつつ受講することが出来ました。”
- ・ご講義ありがとうございました。
- ・楽しかった
- ・英語は苦手だが、高校のときよりも少しは出来るようになったと思う。
- ・英語を聞いたり話したりする能力をもっと上げることで、よりたくさんの人と話して、視野を広げたいと思った。
- ・質問に積極的に答えてくださって良かったです。
- ・楽しく英語について学ぶことができました。
- ・合理的配慮にも丁寧に対応していただけて、授業が受けやすかったです。
- ・英語で話すことが苦手な嫌だったが、この授業で自分から話してみようと思うことができた。
- ・忘れかけていた英語の文法やリスニングを授業でやることができ良かった。
- ・文法やリスニング、単語など、今の現地での使われ方なども学ぶことができたので良かった。
- ・先生の熱意が伝わってきて、真剣に授業を受けることができました。
- ・英語が苦手でしたが、先生の熱意もあり、自分なりに努力できたと思います。
- ・初めての言語で難しかったが、だからこそ自分で努力することができたと思う。
- ・質問内容についてもう少し考える時間が欲しかった。
- ・もっとペアやグループで会話をしたかった。
- ・先生が教科書を音読する授業形式では、学生の意欲・関心を持たせるのは難しいのではな

いかと思います。

- ・グループのメンバーを途中で変更する等、多くの学生と関わる機会が欲しかったです。
- ・教科書の内容をそのまま言ってるだけの講義に感じました。
- ・基本的にずっとネイティブの英語で進んでいくので、聞き取れず内容が分からない時もあったが、質問や提出物に関しての対応も手厚く、いつも楽しい雰囲気です。授業が展開された。
- ・初対面の人と会話することもあったがあまり気にせず話すことができ楽しかった
- ・pc 表現や熟語の使い方など細かな点まで説明をしてくださるので、理解が深まり、英語学習が楽しいと思えた。
- ・本文に関係するちょっとした知識についても話してくれたため、より理解が深まった
- ・授業半ばでは、レベルが上がってついていけなくなったこともあったが、テスト前に改めて復習することで理解でき、テストや課題提出にも積極的に取り組めた。
- ・単にドイツ語の授業をするだけでなく、ドイツ圏のクイズやプレゼンテーションをすることでよりドイツについて知ることができたためとても楽しかった
- ・興味を広げることができました。
- ・自分たちで英語を日本語に解釈する時間がありとても良かった。
- ・毎回楽しくて過ごしやすい環境で授業ができました。
- ・英語を感じる事が五感を使ってできてよかった。
- ・苦手な英語でしたが、授業が楽しく、スピード、先生のサポートにより、前向きに自ら進んで取り組むことができました
- ・SDGs について考えながら英語の勉強ができた
- ・フランス語の基礎を学ぶことが出来た。
- ・担当教員間の課題や成績評価の差がかなり大きいと感じるので調整してほしい。
- ・後期から習熟度別のクラスに分けていたのが非常に良かった。過度に緊張することなく授業を受けることができた。
- ・実際のドイツの写真などを見せてもらい、言語だけでなくドイツの文化や生活、自然に興味を持つことができた。例文や問題文などを声に出して読む機会が多く、アウトプットをすることで記憶に残りやすく、また正しく自然な発音を学ぶことができたのが非常に良かった。
- ・ドイツ語はなかなか難しい言語でしたが、先生が優しく明るく丁寧に教えてくださったので最後まで挫折することなく続けることができました。ありがとうございました。
- ・毎回楽しく受講することができた。また、英語でのコミュニケーション能力もかなり高まったと感じる。
- ・楽しく授業できた。難易度も適切だった。
- ・先生の教え方が上手で、ある程度満足できた授業だった。ただ、授業内容及び期末試験の難易度が高かったと思う。
- ・少し大変だったがやりがいがあった

- ・先生が優しく、安心できた
- ・試験は緊張したが、それ以外は楽しかった
- ・英語を勉強してみようと考えた。
- ・前期の先生と授業の進め方や話し方やテンションの差が大きく、最後までなれなかった。
- ・前期に引き続き進度は遅かったが、満足できるような内容だった。
- ・新しい言語の取得として適切な授業だった。
- ・初めて学んだ言語でしたが、先生が教科書とペアワークを合わせながら授業を進めてくださりとても楽しく、分かりやすい授業でした。また、教科書のみを使う授業の時は非同期の授業にしてとても効率的に勉強を進めることができました。
- ・英語を学習してきた中で触れてこなかった文化や音楽の歴史、言葉遊びなど英語を学びながら文化的なことを学べたので良かった。また、プレゼンテーションを行うことで、英語で発表する、パワーポイントを作成するなど新たな力をつけることができたので英語力をもっと上げたいと強く思った。
- ・toeic の練習問題を取り扱って授業を進めたので、読解、文法、単語力を身に付けることができた。また、長文読解する際は先生と翻訳したり、単語を確認したり、全ての人が授業に参加できていたと思います。
- ・授業時間を通してペアで会話したり、グループのメンバーと会話する時間がとても多くて英語をたくさん話すことができた。
- ・英語会話力が以前より身についた気がする。この講義を履修した成果は十分に得られた。幾度か小テストを取り入れてそれなりに勉強意欲を高めさせてくれた。授業の雰囲気もよく、向上心を持って授業に取り組めたと思う。
- ・人と英語でコミュニケーションをできたのがとても楽しかったです。
- ・内容が他の英語入門に比べて難しかったイメージでした。あと毎授業の課題をしっかりとしないと、ついていけないので苦労しました。
- ・先生の授業の進め方、内容がとても興味深かったです。
- ・ted トークを流す時に英語字幕だったら良かったです。
- ・"it was so fun. Thank you
- ・"It was difficult for me to make sense this class. But my English is getting better.
- ・たびたび授業を欠席することがあったが、その際も学習に遅れが出ないような配慮を取っていただけて、受講しやすい環境が整えられていたと感じている。
- ・授業形態がただ言語を学習することを目的とはしておらず、実際に使える英語に重きを置いていたため非常に役に立ったと個人的に感じている。
- ・前期に受講した英会話 I よりもスムーズにはいかなかったが、教員が適切な指導を行ってくれていたため、ごちないながらも学習を進めることができたと感じている。
- ・フランス語という言語自体の難易度が高いと感じた。

- ・授業では、文化なども知ることができ楽しかった。
- ・ネイティブの英語は通常の英語より難しいところがあるということが分かった。
- ・リスニングをたくさんできた。
- ・教員が愉快で楽しく学習することができた。
- ・クラスの人との関わりを持たせてくれる授業であり、英語が苦手な自分でも楽しく学ぶことができた。
- ・授業内で文章の意味の解説をしていたり、苦手な人に合わせる方向性にしており、少し遅いと思うことはあったが、わかりやすいいい授業だった。
- ・授業内で中国についてのことを話すこともあり、文化の違いを感じることができ、楽しく学ぶことができた。
- ・グループで発表を行うことで、発表への苦手意識と向き合っ少しづつ慣れることのできたので良かった。
- ・自分の英語のレベルに気づき、それをどう向上させていくかを考えるきっかけになった。
- ・生徒からの要望があれば moodle で講義資料を出してくれたため、復習がしやすくかなり助かりました。農林海洋科学部なのでドイツ語 II を朝倉で履修することは難しいですが、オンラインでの講義があれば履修したいです。
- ・単語の暗記が大変でした。
- ・英語で会話をするのが大変でした。
- ・テストの内容があまりにも難しいうえに試験時間も短かったです。また完答問題が多すぎます。ふつうに1問1点で採点してほしいです。
- ・英語が苦手な私でもついていくことができたので、この授業を受講できて良かったです。韓国語は留学を考えるぐらい勉強したかったので、すごく分かりやすく教えて貰えて良かったです。
- ・実際に先生が中国に行った時の話や経験も踏まえながら授業が行われていた。
- ・英語を文面上だけで読むのではなくて、アメリカの背景だったり、思想の情報力が重要だとわかった。
- ・テキストがあまり活用されなかったように思う。”
- ・英会話は苦手だったが、先生が作る授業の雰囲気ですりずつ話せるようになったと思う。メールを英語で送るように言われた事で、難しかったがそれが良い経験になった。
- ・英語に対して抵抗感があったが、今学期の英会話の授業は楽しく英語を使うことができた。
- ・教科書外の実生活に関わる情報を授業で話して下さったため、ためになった。
- ・分かりやすい授業で楽しく英語を学ぶことができました。
- ・グループワークが多くて、たくさんの人と英語でコミュニケーションができて楽しかったです。
- ・討論の準備も十分な時間がとれたので良かった

- ・外国語を勉強してもっと分かるようになろうと思えた。
- ・文法や長文を授業でして、コツや流れを身に着けて今後も少しずつ勉強して理解できるようになろうと思った。
- ・英語以外の外国語で、初めは難しいと感じていたが少しずつ簡単な内容を読めることが出来て良かった。
- ・TOEIC や英語の考え方、様々な書籍、英語の歌の紹介があり英語への学習意欲が高まった。
- ・一方通行型の授業ではなくペアワークを行ったことで英語で自分の意見を言いやすかった。また、毎回ペアの変わるため多くの人と関わることができた。さらに、プレゼンテーションを行ったことで英語で分かりやすいプレゼンテーション資料を作成するために努力することができた。
- ・中国語で書かれた文章（書籍）を読みプレゼンテーションを作成する課題を実施したことで実用的な中国語を学習することができた。また、台湾の教科書を用いたことで日本語に頼らずに中国語を学習することができた。
- ・中国語の先生が凄く熱意をもって授業してくれたのが、印象的でした。
- ・英会話を通して友達が少し増えました。
- ・海外に行ってみたいなと思いました。楽しかったです！
- ・自分が大学の英語のレベルについていけていなかった
- ・英語の能力が身につくだけでなく、外国の文化などに触れることができ、海外に対して興味が深まった。
- ・いろいろな人と英語でコミュニケーションを取ることができて楽しかった。
- ・ディクテーションの力を伸ばすことができて良かった。
- ・普段から少しずつでも英語の勉強をする癖がついた
- ・授業とは関係のない話で、授業が進まず期末テスト範囲の授業ができていなかった。
- ・シラバスにはないテストの実施が多かった。”
- ・外国語を話す練習がしっかりできて良かった。
- ・楽しく英語を学べてよかった。
- ・他国の言葉とその文化を学ぶ楽しさを知ることが出来てよかった。
- ・先生が時々名簿票を忘れた時や授業開始に遅れてきた時など理解しがたい理由で、「出席は今日は取りません」と言い出して出席を取らない日が多々ありました。出席することが主目的ではないことは重々承知しているのですが、これだと真面目に学校に通って朝から勉強しているのが馬鹿らしくなって意欲を失います。特にそれによって明らかに出席に数が足りていない人が試験を受けれているのが大変不服です。遅刻や忘れ物をしたら注意されたり、減点を食らうシステムなのに、先生の気まぐれが通用するのは承服致しかねます。”
- ・話の内容も面白い内容になっていて楽しみながら英語を学ぶことが出来た。
- ・全く知らなかった言語なので、学べて良かったです。
- ・英語が苦手でしたが、先生がわかりやすく教えてくださったと感じます。

- ・英語を人前で話す練習をさせてくれたと感じる。英語を話せるようになりたいと思えた。
- ・学習意欲を高く持って取り組めた。
- ・説明が分かりやすかった。
- ・積極的に英語を使って会話が出来た。
- ・スペイン語を履修していたがシラバスに書かれている教科書が生協やネットなどでも購入することができずシラバスに書かれている教科書を持っていない生徒が数人いた。みんなが購入できる教科書を使うようにしてほしい。
- ・英文を読み解く能力を上げようという意欲が高まった。
- ・毎回、授業ごとにグループワークが異なる人同士で話し合うことが多く、コミュニケーションの向上に役立てることができたと感じた。
- ・文法事項を学ぶことが多かったが、内容が興味深いものが多く、その点でも自分の知識として蓄えることができたと感じる。
- ・授業進度が自分にとってとてもちょうど良く、意欲を持って取り組むことが出来た。
- ・英語が苦手な私でも丁寧な授業のおかげで休むことなく行くことが出来た。
- ・楽しい雰囲気の授業で英語が苦手な私でも楽しく英語を学ぶことが出来た。
- ・新しい言語について学ぶことは、とても面白く感じました。
- ・グループ活動が多く様々な人と英語を通じて交流することが出来たためよかった。
- ・長文読解が苦手なため、中心的に勉強することが出来たためよかった。
- ・教え方も丁寧で分かりやすく、言語だけでなくその言語圏で行われている祭事や文化についても教えてもらえたため、学習に意欲・関心を持って取り組むことが出来た。
- ・英語でディベートをして、実践的に英語に触れることが出来てよかった。
- ・英文解釈のための知識を活用するとともに、言語学について学ぶことができて、とても濃く興味深い内容だった。受講して本当に良かったと思う。
- ・取り組みが工夫されていてとても楽しく学ぶことができた。また、海外の文化に触れることができてとても有意義だった。先生の話も理解しやすく、新しい知識をよく身につけることができた。とても、とても良かった。
- ・2回目の授業の時に、〇〇先生に韓国語の発音を馬鹿にされた。私が韓国語の文を読んだら、小馬鹿にしたように笑われて、韓国語が話せる友人に、韓国語で、「この人何を言っているの？」のようなことを半笑いで言っていた。私が分からないからと言って、理解できない言語で悪口を言うのは、言語の壁を悪用したひどい行為だと思う。言語を教える立場の者としてどうなのか。
- ・中国語の基本的な単語や文法を学ぶことが出来、とてもためになったと思います。
- ・英語の文法や読み解き方だけでなく、物事の考え方まで教わる事が出来、とてもためになる授業でした。
- ・英語で実際に相手と会話することを通して、英語でのコミュニケーションを学ぶことが出来ました。

・テストの範囲が授業で扱われていた範囲だったため、しっかり学習できているか確認することができ、自分の為になる学習ができたと感じました。

・毎回しっかり同じ授業の仲間とコミュニケーションを取る機会があったため、英会話が以前に比べて積極的に行えるようになったと感じます。

以上

3. FD 活動

今年度は、2023年9月12日の14時からメディアホールにて、境一三講師(慶応大学名誉教授)を招聘し、「新学習指導要領は大学教育にどのような変化をもたらすのか？資質・能力論を中心に考える」というテーマのもと FD 講演会を開催した。境講師の専門はドイツ語の第二言語習得論だが、「英語教育」「第二外国語科目」の「高大連携」はどのようにあるべきか、中等教育の新しい学習指導要領を分析したうえで、授業での実践例などについても言及された。当日は高知大学で外国語教育に携わる専任講師ならびに非常勤講師のうちで15名程が出席し、17時近くまで質疑応答が繰り返された。またこのFD講演会に先立ち、境講師の近著『外国語教育を変えるために』(三修社 2022)を外国語分科会会長ならびに副分科会長で講読した。今後、外国語関連科目の単位数の削減への対処や、授業時間外学修をどのように学生に取り組ませるか、課題や試験のフィードバックの方法、シラバスの作成についてなどについて、さらに議論を重ねていく必要があるだろう。

9 キャリア形成支援科目分野分科会

キャリア形成支援科目分科会長 齊藤 雅洋（地域協働学部）

1. キャリア形成支援分野の教育目標

学生のキャリア形成支援に必要なプログラムを開発・提供する。

2. 分科会活動の報告

(1) カリキュラム編成

10月下旬～12月上旬にかけて、教職委員会、資格教育委員会、SUIJI推進室、**学務課全学・共通教育係**と分担し、次年度のキャリア形成支援分野のカリキュラム編成を実施した。授業担当教員に対する次年度開講の形態や時限・曜日等の確認作業の依頼を行い、内容に変更・修正等がないことを確認した。

(2) 自己点検・評価活動

2月下旬から3月にかけて、副分科会長（自己点検・自己評価部会）とキャリア形成支援分野の授業科目（全17科目）のシラバスの点検を行った。「シラバスチェック項目」にそって点検を行い、修正が必要な箇所には「シラバスチェックシート」にコメントを付し、修正箇所等を自己点検・自己評価部会長へ報告した。

(3) FD活動

キャリア形成支援科目分科会単独でのFDは行わず、必要に応じて関連する他分科会等のFDに参加することを基本方針とした。本年度のFDへの参加実績はなかった。

(4) その他

特になし

10 日本語・日本事情分科会

日本語・日本事情分科会長

大塚 薫 (グローバル教育支援センター)

日本語・日本事情分科副会長 (FD 活動担当)

林 翠芳 (グローバル教育支援センター)

日本語・日本事情分科副会長 (自己点検・自己評価活動担当)

渡辺 裕美 (人文社会科学部)

<活動の概要>

日本語・日本事情科目は、第1学期に「日本語Ⅰ」、「日本語Ⅱ」、「日本事情Ⅰ」、「日本事情Ⅲ」、第2学期に「日本語Ⅲ」、「日本事情Ⅱ」、「日本事情Ⅳ」が開講されている。

ここ数年、「日本事情」科目に比べ、「日本語」科目の受講者数が少なく、受講者数の偏りが見られた。新型コロナウイルス禍を経て特別聴講学生(短期交換留学生)の受入れが2022年10月から従来通りに再開したもののコロナ禍以前の水準には戻らないこともあり受講者数が軒並み減少したが、今年度もその傾向が継続している。受講生からは「日本語」科目の授業が週2回の授業で2単位が取得できるのに対し、「日本事情」は週1回の授業で2単位の取得が可能のため、単位取得に際し、日本語科目の単位取得に多くの時間を割かなければならないことが指摘され、それが「日本語」科目が受講生に敬遠される一つの要因になっているようだ。

現在、共通教育の開講科目として、日本語Ⅰ～Ⅲは演習、日本事情Ⅰ～Ⅳは講義とそれぞれ設定されており、そのためか、日本語Ⅰ～Ⅲは週2回×16週で2単位、一方、日本事情Ⅰ～Ⅳは週1回×16週で2単位として設定されている。教授内容に違いがあるものの、単位数に響くほどのものではなく、単位数の認定が受講者数のアンバランスに影響しているのではないかと考えられる。

また、従来日本語・日本事情科目は「外国人留学生及び学則第40条第2項(外国において相当の期間中等教育を受けた者)に該当する学生のための科目」として定められ、正規生のための科目として開講されていた。近年は、特別聴講学生(短期交換留学生)の受講が増加し、2020年度から3年にわたるコロナ禍においては事情が異なったが、2010年度以降は日本語科目においては非正規生の受講が受講生の8割以上を占めている場合もあった。特別聴講学生は、母国で日本語・日本文化を専門として勉強している学生であり、高度な日本語力を有している。

日本語科目において履修学生に求められている日本語力は、日本語能力試験N1レベル(上級レベル)相当の能力であり、他の外国語で定めている基準より高く設定されている。実際に、履修している外国人留学生は、正規生及び特別聴講学生ともに本学で専門

科目を日本人学生とともに学習している学生であり、上級レベルの日本語力を有しているため、日本現地で学習するという環境に加え、週1回の授業でも十分な学習効果が期待できる。さらに、週2回の受講の縛りをなくすことにより、外国人留学生は授業の選択の自由度が増え、より多くの教員の授業を受講することが可能になると考えられる。

以上の問題点を踏まえ、外国人留学生が週1回でも日本語科目が取れるようになることは検討すべき今後の課題である。

1. カリキュラム編成

今年度も引き続き、人文社会科学部の教員は日本事情科目を、グローバル教育支援センターの教員は日本語科目を担当した。科目構成は、日本語科目については日本語教育専門のグローバル教育支援センターの専任教員1名が2019年度末で退官しその後補充がなかったため、2019年度当初から1科目減少し日本語Ⅰ～Ⅲ、日本事情科目については日本事情Ⅰ～Ⅳを実施した。

また、2023年度の開講基本コマ数、担当体制については、面談やメール等で調整を行い、担当者及び開講曜日・時限を決定した。

2. 自己点検・自己評価活動&FD活動

日本語・日本事情分科会では、2006年度～2008年度にわたって分科会独自の形式で授業評価アンケート調査を全科目の受講学生を対象に実施した。それにより、各授業の自己点検評価活動が行われるとともに、共通教育日本語・日本事情科目のあり方を考えていく基礎資料とすることができた。また、2009年度以降は、共通教育が実施する自己点検評価活動等の実施を通して、授業の改善に努めている。

2023年度において、日本語・日本事情分科会では、日本語・日本事情科目の特性である少人数制授業に焦点を合わせ、自己点検活動及びFD活動を連動させた活動を行っている。具体的な活動としては、日本語Ⅲの授業内で学生によるレビュー活動を実施するとともに日本語Ⅰ・Ⅲ、日本事情Ⅲ・Ⅳでは、授業終了時に独自の授業アンケートを実施し、授業の自己点検・改善のための資料とした。しかし、日本語・日本事情科目は全7科目を5名の教員で担当して行っている上、今回のレビュー活動並びに独自の授業アンケート調査を実施した科目は限られ、統計に値する十分な資料が得られなかったため、ここでは詳細な結果は省略する。また、オンライン授業やアクティブラーニングに関するFD研修を個人ベースで受講し、授業のさらなる改善に努めた。

その他、自己点検・自己評価活動として2024年度の日本語・日本事情科目を担当する教員のシラバスを確認し、教育の内部質保証として学生にとってより分かりやすい内容のシラバスになるよう修正を行った。

3. その他

新たな授業の開発としては、日本語・日本事情分科会で開講している科目内で今般のポストコロナ禍における最新の日本文化の理解や文部科学省の最優先課題である「高度外国人材の日本企業への就職の拡大」を目的としたビジネス日本語教育も展開した。また、日本語Ⅲの授業内で交流授業として受講生に加え学内の日本人学生と協定校の学生とピア・ラーニング活動を行うなど新たな授業方法の開発にも努めた。

2024 年度以降も購入した書籍の内容を踏まえて、留学生の体験型学習や日本における就職時に必要なビジネス日本語教育、対面教育とオンライン教育を並行して実施するハイブリッド型教育を日本語・日本事情科目内で取り入れ、留学生のニーズに応じていきたいと考えている。

また、共通教育の広報誌である『PipeLine 62 号』で「日本語・日本事情分科会」の特集記事として「日本語」科目から日本語Ⅰと日本語Ⅲ、「日本事情」科目から日本事情Ⅲと日本事情Ⅳを取り上げ、具体的な授業内容や特徴的な取り組みについて紹介した。